

「多摩川、民話、市民農園、 千人同心、絹・織物」

2010年度インターゼミ（社会工学研究会）

多摩学グループ



多摩学電子新書 vol.8

（多摩学新書）

社会工学研究会

多摩学研究

チーム：TAMA魂 多摩学

高橋 豪

石川 健太

高遠 恵治

三谷 明史

山田 真里帆

はじめに

本論文では、2011年度多摩大学寺島学長インターゼミの一テーマである「多摩学」研究として、多摩の様々な特徴をつかむために研究を行った。多摩地域は様々な変化を経験し、古代中世以降、多様な人の定住と交流の上に社会が成立し、現代ではグローバル化、少子高齢化といった様々な要因が多摩の環境に影響を与えている。その状況下で、本研究は私達の最も身近にある地域的な特徴(ローカリティ)と、地域の特徴をつかまえるのに前提として置いた外部要因の両面から多摩地域の特徴を見出すことを目的とする。両面から多摩の社会的・歴史的特徴を知る事は、私達を取り巻く社会の未来を知ることにも共通する方法として大いに役立つはずである。このような認識にたち、今回は5つの視点から多摩地域を研究することにした。

第一に多摩地区の水源であり、洪水や人災の悩みであった多摩川に対する水防意識の変化を調査することとした(第1章)。この多摩川の上流と下流は、地勢上、多摩地域の山間部と平野部を結んでいる。この二つの地域の生活者の意識について民話を題材に検討を行った(第2章)。さらに現代の多摩山間部と23区並びにその郊外を結ぶ動きとして、市民農園の活動がクローズアップされている。現代の多摩に特徴的な動きとして奥多摩の市民農園についても検討を行った(第3章)。一方、多摩地域の古くからの中心地のひとつが八王子であった。この八王子に生まれ、新撰組との関わりという形で現代にも強い記憶を残している八王子千人同心の蝦夷地開拓を題材に、ロシアからの対外的脅威に直面した際の半士半農組織の組織変化についての研究を行った(第4章)。同じく八王子に花開きながらも現代では衰退の道を歩んでいる養蚕業・絹織物産業の変化推移についても調査を行った(第5章)。

これら5つの視点から多摩地域の調査を行った。これら5つの研究の結果、多摩地域の地域的な特徴とその前提となっている外部要因を抽出する事が出来た。その詳細については第6章に記すが、本研究の結論を一言で言えば「多摩は一つではない。多様な内部的な特徴と外部的な要因を把握しないと掴むことのできない極めて多様(複層的)な地域である」という事である。この結論を念頭において第1章以降の論考をご覧いただきたい。

目次

はじめに	1
------	---

第1章 多摩川における水防の課題～歴史的観点から～(高遠恵治)	4
---------------------------------	---

第1節 多摩川の現状と水害の歴史

- 第1項 多摩川とは
- 第2項 江戸期の多摩川水害
- 第3項 明治期の多摩川水害
- 第4項 大正期・昭和期の多摩川水害

第2節 水防の現状と課題

- 第1項 水防の種類
- 第2項 水防の知恵
- 第3項 多摩川と鶴見川の比較
- 第4項 水防の課題～インタビューからみえてくるもの～

第3節 まとめ

第2章 民話に見る多摩の生活意識(山田真里帆)	20
-------------------------	----

第1節 多摩の口承文芸

第2節 民話の類型化

第3節 考察

- 第1項 生活圏と神・動物の関係
- 第2項 課題の質と環境の関係
- 第3項 生活環境と死の概念の関係

第4節 まとめ

第3章 環境における市民農園の可能性(石川健太)	60
--------------------------	----

第1節 各時代における市民農園の役割

- 第1項 ドイツの市民農園の歴史
- 第2項 日本の市民農園の歴史

第2節 市民農園の新しい役割

第3節 まとめ

第4章 蝦夷地開拓にみる八王子千人同心の組織文化（三谷明史）—— 64

第1節 千人同心の組織

第1項 千人同心とは

第2項 組織構造・構成員

第2節 日光・江戸での千人同心

第1項 日光勤番

第2項 江戸勤番

第3節 蝦夷地に行くことになった経緯

第1項 緊迫のロシア南下政策

第2項 旅立った千人同心たち

第4節 蝦夷地での千人同人

第1項 蝦夷地移住とは

第2項 第1回職務内容・成果

第3項 第2回職務内容・成果

第5節 組織の比較

第1項 蝦夷地開拓前と開拓時での組織構造の差異

第2項 考察

第6節 まとめ

第5章 八王子織物産業の形成と衰退（高橋豪）—— 78

第1節 養蚕業と絹織物業

第2節 養蚕をなぜ八王子で行ったか？

第3節 八王子と織物の歴史

第1項 古代～江戸時代前期の八王子と織物

第2項 江戸後半期の八王子と織物

第3項 明治時代の八王子と織物（開港編）

第4項 明治時代の八王子織物（浜街道・鍮水商人編）

第5項 明治時代の八王子織物

第6項 大正・昭和戦前期の八王子織物産業

第7項 戦後の八王子織物

第8項 現在の絹織物（不況と闘う多摩シルクライフ 21 研究会）

第4節 まとめ

第6章 まとめ —— 87

第1章 多摩川における水防の課題 ～歴史的観点から～

経営情報学部 20911178 高遠恵治

はじめに

社会工学研究会の多摩学のメンバーとして、いくつか挙げられたテーマの中からここでは多摩川について考察をする。多摩らしさというローカルな部分を知るために、文明の発展に欠かせない資源「水の存在・多摩川」を知ることで見えてくるものを探求したい。

本論文は、江戸時代から現代までの水害や治水の歴史から今後の多摩川の水防について考察する。時代や社会変化によって変貌する多摩川の歴史は非常に興味深く、私は多摩川の水害と水防の歴史から、多摩川（多摩）の独自性や、現代の水防の課題を明らかにすることを目的とする（注¹）。

第1節 多摩川の現状と水害の歴史

第1項 多摩川とは

図1にみるとおり、多摩川は、山梨県塩山市の笠取山山頂の南斜面下「水干」（みずひ）を源とし、秩父多摩国立公園の大菩薩嶺、雲取山などの連峰に水源を得て東南に流れ、小菅川を合わせて奥多摩川に流入し、奥多摩湖となる。さらに日原川、秋川、浅川等を合流し、武蔵野台地と多摩丘陵の間を流れて、東京都大田区羽田において東京湾に注いでいる。その流域は、山梨県、東京都、神奈川県の一都二県にまたがり、流域面積は1240km²、幹川流路延長は138kmの一級水系である。流域面積は国内で50位である。多摩川の流域面積は、



図1 多摩川流域図

（出典、京浜河川事務所管理区間「多摩川マップ」を筆者編集）

国内最大の流域面積を持つ利根川の7.4%にすぎない。流路延長（注²）は利根川の43%で全国23位であり、流域面積に対し比較的長い川となっている。

京浜工業地帯の中心地域となっていた調布付近から下流は、東京都と神奈川県との境界となっている。この付近から多摩川は三角州性河川となり、六郷橋下流は六郷川とも呼ばれ、この両岸一帯は石油、鉄鋼などの大規模な工場が多く、首都圏の社会・経済などの基盤となり、その治水と利水についての役割は大きい。また、都心近くに残された数少ない自然が息づくため沿岸住民に親しまれる多摩川は、治水効果によりおとなしい川とされているが、過去では暴れ川であり、水害の危険が消えたわけではない。今回は、そんな多摩川の持つ自然の脅威や水害の歴史を見ていきたい。

第2項 江戸期の多摩川水害

本論文で水害とは、水害の頻度×被害規模を意味するものとする。この水害の性質は時代によって異なる。まず、江戸期の水害を概観する。

江戸以降、水害についての史料は充実している。その背景には、年貢米の増収を図るために治水を重要視した幕府の思惑がうかがえる。まずは、江戸時代における多摩川の水害年表をみてみよう。

表1 水害年表（江戸期）

（出典、『新多摩川誌』と『あばれ多摩川発見紀行～きゅうさんと行く多摩川治水史～』をもとに筆者作成）

1590（天正18）多摩川大洪水
1606（慶長11）多摩川大洪水 この洪水により、本川中流部左岸の分倍河原旧流路が現流路に移動したと言われる
1613（慶長18）下流の六郷橋が洪水で流出
1627（寛永4）多摩川洪水で下流左岸の羽田徳泉寺が破壊流出し、右岸川崎宿久根崎町に移して再建する
1644（正保元）8月、多摩川大洪水で下流右岸川崎と左岸六郷で水害発生
1648（慶安元）7月、多摩川大洪水で下流右岸川崎水害発生。六郷橋破壊
1650（慶安3）9月、多摩川大洪水で下流右岸川崎水害発生。下流左岸下野毛村西南で堤防決潰し氾濫。下流左岸羽田では川筋が変わる。
1651（慶安4）前年の水害対策として、下野毛では村の土地を潰して川筋を掘替える
1671（寛文11）8月、多摩川大洪水で、下流右岸川崎水害発生。六郷橋再び流失
1672（寛文12）5月、多摩川大洪水で下流右岸川崎水害発生。前年に流失して再復旧した六郷仮橋が、また流失
1674（延宝2）多摩川下流左岸に氾濫し、現大田区内にあたる地域の農作物が全滅
1680、1681（延宝8、9）中流部左岸の拝島用水（現・昭和用水）に洪水が流入し、用水下流の大神村まで氾濫する

- 1684 (貞享元) 多摩川大洪水で、下流右岸川崎水害発生
- 1685 (貞享2) 多摩川洪水で、中流部左岸拝島作目村が全村壊滅
- 1686 (貞享3) 多摩川洪水。北浅川で山地崩壊があり、大水害となる
- 1688 (貞享5) 7月21日、多摩川大洪水で、下流右岸川崎南加瀬村10町歩水害

(元禄元年) また、六郷橋が流失し、以後架橋は断念される

貞享年間 (1684~1688) 多摩川大洪水で、下流右岸、宿河原のうなぎ
土手破堤

- 1694 (元禄7) 多摩川洪水で、下流右岸川崎南加瀬村22町歩水害
- 1699 (元禄12) 多摩川洪水で、下流右岸川崎南加瀬村59町歩水害

- 1701 (元禄14) 中流部左岸、拝島堤決壊
- 1721 (享保6) 7月、多摩川洪水で羽村堰決壊
- 1726 (享保11) 多摩川出水
- 1733 (享保18) 多摩川出水
- 1734 (享保19) 8月、多摩川満水で中流部左岸・拝島で川欠
- 1735 (享保20) 6月、多摩川洪水
- 1742 (寛保2) 8月、多摩川大洪水。中流部左岸の昭和用水堰が埋まり、堤内へ氾濫し、水田に石砂が入る。下流部右岸の川崎では、堤防決壊し、川崎宿の小土呂・砂子では床上1.5mの侵入。下流部左岸の六郷用水では、取入れ口が壊滅。ほか、各所で堤防決壊し、川通20里の間で、緊急改修を要する場所が百数十個所にのぼる。
- 1743 (寛保3) 多摩川出水
- 1749 (寛延2) 8月、多摩川洪水
- 1751 (宝暦元) 多摩川洪水で、下流右岸・上平間堤決壊
- 1755 (宝暦5) 5月、下流右岸デルタの大師河原村で、潮除堤 (干拓堤) 決壊
- 1757 (宝暦7) 多摩川洪水
- 1765 (明和2) 多摩川出水
- 1766 (明和3) 多摩川洪水。このとき、下流左岸の世田谷の井伊領8カ村に氾濫
- 1772 (安永元) 多摩川洪水
- 1775 (安永4) 多摩川出水
- 1777 (安永6) 多摩川出水
- 1778 (安永7) 多摩川洪水
- 1780 (安永9) 多摩川洪水
- 1781 (天明元) 7月、多摩川洪水で下流左岸世田谷で氾濫し、8町6反の畑が石河原

に等しくなる

- 1782 (天明2) 多摩川出水
- 1783 (天明3) 6月、多摩川洪水で、下流左岸猪方村堤120間破堤
- 1784 (天明4) 多摩川出水
- 1785 (天明5) 多摩川出水
- 1786 (天明6) 7月、多摩川洪水で、下流左岸猪方村堤破堤
- 1787 (天明7) 多摩川出水
- 1788 (天明8) 8月、多摩川満水
- 1789 (寛政元) 多摩川出水
- 1790 (寛政2) 多摩川洪水で、下流右岸の矢ノ口・菅村境の堤防決壊し、中野島村では人家が流失、登戸下流では床上4尺の浸水。このときの切所には、現在、水神が祭られている
- 1791 (寛政3) 多摩川大洪水で、下流左岸・猪方村8箇所240間、大蔵村堤7箇所200間、宇奈根村堤6間、下野毛村堤30間が決壊
- 1795 (寛政6) 7月、多摩川大洪水で、下流左岸の大森では洪水位が1丈3尺余りに達する
- 1799 (寛政11) 多摩川洪水で、下流左岸、六郷用水の用水堤が岩戸村で大破

- 1801 (享和元) 多摩川満水
- 1802 (享和2) 7月、多摩川満水で、下流左岸猪方村大堤切れる
- 1803 (享和3) 多摩川洪水で、下流右岸川崎堤決壊
- 1804 (文化元) 多摩川満水で、下流左岸宇奈根が水押しになる
- 1808 (文化5) 多摩川洪水
- 1809 (文化6) 多摩川出水し、下流左岸堤120間大破 (和泉村26間・猪方村30間決壊)
- 1810 (文化7) 下流右岸の稲毛川崎二ヶ領用水の宿河原取水口を現位置に設けて堰上げを行ったため、対岸 (左岸) の猪方村一部川欠となる
- 1811 (文化8) 多摩川洪水で、猪方村堤8箇所切断される。中流部左岸の拝島築地村では全村流出する
- 1814 (文化11) 多摩川洪水で、下流左岸・和泉・猪方村堤の数箇所決壊
- 1816 (文化13) 多摩川洪水で、中流部左岸拝島堤、下流部右岸川崎堤決壊
- 1818 (文政元) 多摩川洪水で、拝島山王下の用水取水口が決壊
- 1822 (文政5) 6月、多摩川大洪水、下流左岸の5カ村で水害
- 1823 (文政6) 7月、多摩川大洪水
- 1824 (文政7) 多摩川洪水で、下流左岸8カ村水押し。中流部左岸・拝島山王下で300間決壊

- 1829 (文政12) 多摩川洪水で、下流左岸猪方村で堤防決壊
- 1832 (天保3) 多摩川洪水で、下流左岸猪方村堤決壊し、5町歩に被害
- 1833 (天保4) 多摩川洪水
- 1835 (天保6) 多摩川洪水で、下流左岸の羽田尾崎耕地流出
- 1836 (天保7) 多摩川洪水
- 1846 (弘化3) 6月、多摩川大洪水で、中流左岸・拝島用水堰より氾濫。11月、多摩川再び出水し、下流左岸・猪方村堤100間、和泉村堤120間決壊する
- 1852 (嘉永5) 多摩川洪水
- 1853 (嘉永6) 多摩川洪水
- 1856 (安政3) 8月、多摩川大洪水。満水で、下流左岸・猪方・和泉堤切断され、一円に水害
- 1858 (安政5) 7月、多摩川大洪水で、中流部左岸、大神村堤決壊
- 1859 (安政6) 7月、多摩川大洪水。羽村堰破壊され、玉川上水止まる。中流部左岸では、福島村25戸、中神村15戸、宮沢村4戸が流出。下流部左岸では、和泉村堤500間切断され、猪方大堤決壊。8月、再び多摩川出水し、猪方村堤20間決壊
- 1862 (文久2) 多摩川洪水で、下流左岸、和泉村160間決壊
- 1863 (文久3) 8月、多摩川洪水で下流左岸、和泉村55間決壊
- 1864 (元治元) 8月、多摩川洪水で下流左岸、和泉村堤160間決壊し、一円に冠水する
- 1865 (慶応元) 5月、多摩川出水し、下流左岸倍方村大堤1町20間にわたり大決壊。田畑には土砂が押し入る

表1を見ると、1600年代には洪水が頻繁に起きていたことが分かる。江戸期には、洪水の頻度は高かったが、その割には被害が少ないように思える。これは、江戸時代の人々の水害の認識度に関係している可能性がある。例えば、水田が造られていない荒地で水害頻度が高い場所での出水は水害と認識されなかったであろうし、逆に水害頻度が低い場所でも水田や集落が密集していれば、大きな水害と意識されたであろう。多摩川は暴れ川で、特に今の大田区や世田谷区などの下流地域の被害が多発していた。今でこそゆっくり流れている下流の姿が印象深いですが、治水事業を行った人々の努力や被害を受け苦しんでいた人々の苦しみを忘れてはならない。ここで江戸期に治水で活躍した人物を紹介する。

まずは、多摩川流域新田開発の功労者、小泉次大夫吉次である。旧姓を植松といい、先祖代々水利土木技術の伝統を誇る家に生まれた。1590(天正18)年に、徳川家康の家臣として江戸に入った次大夫は、多摩川の治水奉行となった。洪水が激しかった当時の多摩川。

沿川の村は荒廃し、水田開発も遅れ、人々は苦しい毎日を過ごしていた。そこで次大夫は、家康に用水堀りの開削や新田開発を進言したのである。

家康はこの願いを聞き入れ、1597（慶長2）年に次大夫は、多摩川下流左岸の世田谷・六郷領に六郷用水を、右岸の稲毛・川崎領に二ヶ領用水を開削するための測量を始め15年かけて工事をした。二ヶ領用水は、全長約32kmで稲毛領・川崎領合わせて60村の耕地1,876町歩を潤す水路であり、多摩川水利史上初の農業水路を手掛けたのである。これは当時の人々の苦しい思いを和らげたいに違いないだろう。二つの用水を完成させた次大夫は、すでに73歳であった。

1623（元和9）年、85歳の生涯を終えた次大夫は、川崎宿の妙遠寺に埋葬された。用水の開拓に多大な貢献をした小泉次大夫吉次は妙遠寺（川崎区宮前町6-5）の「泉田二君功德碑」に名が刻まれている。

次に、田中丘隅という人物についてである。丘隅は、寛文2年（1662）、武蔵国多摩郡平沢村（現・秋川市）の商人・窪島某の二男、喜六として出生する。22歳の時、川崎宿で下本陣をつとめていた田中兵庫の娘婿となり、45歳で田中家を相続。二代目田中兵庫を名乗る。丘隅が田中家を相続した当時、東海道五十三宿の1つ川崎宿は伝馬役の負担増が問題となり、抛出金の負損は宿を支える地元農業の生産力低下へと影響し、宿経営の根幹がゆさぶられていた。丘隅は、宿の財政建て直しの活路を多摩川渡船に求め渡船賃収入により伝馬役抛出金の肩替りをさせようと図った。多摩川下流の東海道の渡河は、六郷橋によっていたが、多摩川洪水による六郷橋の度重なる流出のため、貞享5年（1688）の多摩川洪水による六郷橋流出以降、架橋は断念され六郷地点の渡船が代行していた。丘隅の試みは、この多摩川渡船の独占を図ったもので、川崎宿の多摩川永代渡船権の獲得は幕府に認められ、丘隅の宿再建策は成功した。財政が好転すると丘隅は、50歳にして江戸に遊学の旅に出る。そこで荻生徂徠に学び、成島錦江と交わりを深めることとなる。一年かけて、17巻からなる「民間省要」を享保6年（1721）に著すと、八代将軍吉宗に認められ、川除御普請御用として幕府の治水事業に携わるようになり、この時61歳で名を田中丘隅右衛門と改めたのである。

丘隅は、多摩川下流右岸の大丸用水と稲毛川崎二ヶ領用水の改修、下流右岸の小杉の瀬替え、下流の連続堤の築堤などを行い、「多摩川流」という河川土木技術をおこし、これらは全国の河川土木技術に大きな影響を与えた。他にも、担当した酒匂川などで水防組合をつくり、水防に備えさせるなどの取り組みも行っている。

最後に、治水事業で貢献した川崎平右衛門定孝である。平右衛門は、1694（元禄7）年に北多摩郡多摩村（現・府中市）の名主の子として生まれた。府中・押立に水害防備林として竹林の栽培や多摩川中下流部の新田開発などを進めるなど、故郷に貢献した人物である。30代で新田世話役を命じられた平右衛門は、無堤防部だった多摩川中下流の村の水防を強化しつつ新田開発で実績をあげた。のちに譜請奉行として押立の堤防改修工事、中流部左岸の両岸20余里に及ぶ公領、私領の堤防や樋門の改修工事に携わった。

有名な木曾川改修工事（宝暦治水）も担当した平右衛門は、田中丘隅と同様、多摩川治水の経験を、他の川で活かし多大な貢献をしたのである。晩年は、島根県の石見銀山奉行を兼ねていたが、1767（明和4）年、73歳の生涯を終えた。

彼らは、治水で当時の多くの人々の生活を守ろうと身をささげてきた人物である。彼らの功績は大きく、これからも多摩川の流れを見守ってくれるだろう。この3人の志や学ぶ姿勢は、尊敬に値する。我々は豊かさを手に入れたが、志の意識を失いかけているように感じる。次の世代のためにも、志を持ち生きていくことが大切なのではないだろうか。彼らの生き方から学ぶことは多い。

第3項 明治期の多摩川水害

近世以来の水害の頻発は、明治期に入りますます深刻化し、抜本的な水害対策が進まないまま水害激化の方向をたどる。明治中期以降の水害の激化は、豪雨頻発といった気象条件に起因するものだけでなく、高水工事の遅延、河川内恒久構造物の増加のほか、明治維新以来の急激な経済発展に伴う被災対象物の著しい増加と河川付近の土地利用の高度化など様々な要因が考えられる。いずれにしても明治期の水害の激化を契機として、洪水防御を目的とした近代治水への要請が強まることとなる。（6）

多摩川においても同様に水害が頻発し、記録に表れた水害だけでも22回に及ぶ。なかでも1907（明治40）、1910（明治43）の相次ぐ大洪水は、かつてないほどの大被害を発生させた。

明治40年以前の主な水害について、いくつかの資料は次のように記録している（表2）。

表2 水害年表（明治期）

（出典、『京浜河川事務所ホームページ』と『新多摩川誌』と『あばれ多摩川発見紀行～きゅうさんと行く多摩川治水史～』をもとに筆者作成）

1868	（明治元年5月8日）	大風雨のため多摩川が出水し、六郷用水取入口の掘割が残らず壊滅（大田区史年表）
1868	（明治元年7月18日）	大雨、和泉村堤315間決壊（狛江市水害史）
1870	（明治3年7月9日）	暴風雨、多摩川出水、和泉村堤決壊、耕地一円冠水（同上）
1873	（明治6年9月24日）	前日の暴風雨のため六郷川（多摩川）が出水し、東京～横浜間の汽車が不通となる（大田区史年表）
1875	（明治8年8月10日）	暴風雨により六郷橋（佐内橋）が破損する（同上）
同年8月11日		多摩川洪水、羽田村弁天橋が流失し、羽田獵師町、鈴木新田、八幡塚村など浸水する（同上） 羽田村弁天橋洪水のため過半押流し、同村内獵師町の地所凡百坪程崩流し、民家10軒破損し、同村鈴木新田多摩川の堤防凡7間程崩る（東京市史稿変災篇）
1876	（明治9年9月17日）	六郷橋は水溢れて、八幡村の往還は舟にて通行し、六郷橋近辺の軒を浸し、老功を助けて逃るもあれど幸ひに怪我なく、（同上）
1877	（明治10年7月26日）	六郷橋の橋脚間2間が押し流される（大田区史年表）
1878	（明治11年9月15日）	多摩川の洪水により佐内橋が流失する。また、このとき北見方村、諏訪河原村の田畠が冠水し被害を受ける（川崎市史）
同年9月16日		八幡塚村ほか数か村で堤防が決壊し、羽田村ほか25か村が水害を受ける。この洪水で羽田獵師町の日蓮宗長照寺（本羽田）が流失する（大田区史年表）
1884	（明治17年9月17日）	
同年9月18日		
1885	（明治18年7月2日）	
1889	（明治22年9月13～14日）	六郷川暴漲（同上）暴風雨により多摩川堤防決壊、農作物被害を受ける（立川市史）
1890	（明治23年9月22～23日）	（東京市史稿変災篇）
1891	（明治24年6月22日）	（同上）
1894	（明治27年8月11日）	（同上）
1896	（明治29年9月8～9日）	（同上）
1897	（明治30年9月9日）	多摩川漲溢（同上）

- 1898（明治31年8月24～26日） 多摩川出水東京府調布町布田堤塘決壊二ヶ領組合へ切元付決損す。非常召集を行ひ辛くも喰止む（稲毛川崎二ヶ領用水事績）
- 同年9月6～7日 多摩川出水。（東京市史稿変災篇）多摩川増水宿河原取入口大破損を生ず。（稲毛川崎二ヶ領用水事績）
- 1899（明治32年10月6～7日） 六日より強雨7日より暴風雨同夜多摩川増水（同上）
- 1902（明治35年9月12日） 上河原口急破仮へ切全部流失取入口堀割箇所埋塞（同上）
- 1906（明治39年8月24日） 増水は平水面に比べて多摩川5.1m、六郷川4.5mであった。このため多摩川に係留した砂利船100隻は流出し、六郷川に架橋中の京浜電鉄専用橋の橋げたは約35mにわたって流出した。その他六郷川沿岸では被害が多かった。

この時期の水害について『新多摩川誌』（6）では次のように記している。

ここに記された数々の水害は、中小洪水によって引き起こされたものである。これらの水害を繰り返しながら、やがて1907年、1910年の大水害が発生することになる。近世以来、部分的な堤防の築造が行われてきたが、それらは今日でいういわゆる旧堤であり、高さにおいてもまた幅においても、今日の堤防に比べれば、相当貧弱なものであったと想像される。したがってそうした旧堤は比較的容易に破堤、溢水といった状況を呈した。しかし、上中流部における氾濫流は地形の制約により、それほど広範囲に及ぶことはなかった。ただし下流部においては、右岸の氾濫流が鶴見川低地に流れ込み、鶴見川の氾濫と合して著しい浸水を生ずることもある。また左岸の氾濫流は河口および臨海部の町村に押し寄せることもあった。

第4項 大正期・昭和期の水害

今の治水技術の進歩により水害頻度が下がっているようである。堅固な連続堤防が整備されるに従い、出水件数も少なくなる。それを示しているのが下記の表3の水害年表である。

表3 水害年表（大正期, 昭和期）

（出典. 『京浜河川事務所ホームページ』と『新多摩川誌』と『あばれ多摩川発見紀行〜きゅうさんと行く多摩川治水史〜』をもとに筆者作成）

1913	（大正2）	台風による増水で六郷川の堤防が約50mにわたり決壊、床上浸水400余戸
1914	（大正3）	台風により出水 早期築堤を求めたアサガミ事件
1917	（大正6）	洪水と高潮が重なり被害甚大
1923	（大正12）	関東大震災により多摩川左岸・右岸とも各所で堤防亀裂、沈下陥没。支川でも護岸堤防に被害がでる
1924	（大正13）	台風のため六郷川、川崎付近で水量計水没、六郷橋が中央から墜落・流失し、東海道は交通途絶
1937	（昭和12）	豪雨による多摩川大洪水
1938	（昭和13）	多摩川大洪水。青梅で家屋流出、消防組出動
1947	（昭和22）	カスリーン台風により多摩川、秋川、浅川で出水
1948	（昭和23）	アイオン台風により多摩川、秋川、浅川で出水
1949	（昭和24）	デラ台風により多摩川調布で出水。キティ台風により多摩川調布で出水、六郷用水氾濫
1950	（昭和25）	豪雨により多摩川稲城町（現・稲城市）で水害
1952	（昭和27）	多摩川出水
1954	（昭和29）	台風14号により多摩川出水
1963	（昭和38）	集中豪雨で野川はじめ未改修部氾濫
1965	（昭和40）	台風6号により多摩川堤防損壊
1966	（昭和41）	台風4号の豪雨によりニヶ領用水、矢上川、平瀬川などで水があふれ、または決壊、床上浸水3400戸の被害。
1970	（昭和45）	洪水で上河原頭首口流出
1974	（昭和49）	台風16号による狛江水害。多摩川左岸狛江市地先にて本堤260mにわたって決壊（人家19棟流出）
1982	（昭和57）	8月、台風10号により、川崎市などで床上・床下浸水163戸ほかの被害 9月、台風18号により、川崎市などで床上・床下浸水60戸ほかの被害

戦後すぐの国土荒廃期には水害が集中しているものの、全体的には水害件数が減っている。昭和49年の狛江水害を最後に、多摩川で水害と呼ばれる大きな被害はない。狛江水害で、我々は自然の脅威と水害の恐ろしさを知ったのである。治水技術の向上により、1974（昭和49）年以来大きな水害は起きていない。多摩川流域に流入してきた人口も増大し、

水害を知らない人々が増えている。

第2節 水防の現状と課題

ここで、治水と水防の違いを簡単に説明する。まず治水とは、洪水によって起こる災害や被害をあらかじめ予測し、堤防などの整備を行い流域の住民や土地を守ることである。これらの整備は、主に国や都道府県の機関が行う。一方、水防は土のうを積んだりして、被害を未然に防ぐ、または最小限に抑えることである。水防は各市町村の責任で行うことになっている。この事前と事後の両方の備えが大切である。

表4 多摩川の治水・水防の時代比較図

	多摩川治水	多摩川水防
江戸	自然のものを使った治水工法（弁慶杵など）	水防組織の強化や用水ブロックの形成
現代	ダムや連続堤防など（コンクリート使用）	住民レベルの防災訓練やハザードマップの作成など

私は、田中丘隅を通じて水防組合の組織を発見した。水防の課題を知るために、この組織の活動や情報伝達について調べたが、詳しい江戸時代の史料や情報が見つからなかった。過去は年表などから読み取るとして、今の治水や水防の実態を京浜河川事務所に聞き、現在の水防の課題を考察していく。

第1項 水防の種類

多摩川をはじめ全国で様々な水防活動・種類が存在する。治水工法があるように、水防工法もある。水防工法は40工法以上ある。

主なものとして洪水時に堤防が沈下したり、水が増え堤防から溢れそうな時に使う積み土のうや急な流れによって堤防が削られるのを防ぐ木流しなどがあるが、1974（昭和49）年の狛江水害のように破壊力がある水害では効果がなかったものもある。しかし、住民レベルで作業できる水防工法（土のうや縄の締め方）などが緊急時に役立つことは必ずある。作り方や対処法などを訓練していれば、被害や犠牲者を少なくすることができる。

第2項 水防の知恵

知恵というのは、普段思いつかない。何かに関り考え続けた末に閃くものだと私は思う。宮村忠の「水害—治水と水防の知恵」（8）に書かれている畳の使い方や戸の利用は水害で苦しんだ人々の強い意志を感じる。

宮村によれば畳は家の中にあるもので、それ以外に使い道があるとは想像もしていなかったが、水害で濡れた畳は堆肥に使用していたようだ。雪国では春を迎えるにあたって濡

れた畳を燃やして灰をつくり、雪の積もる耕地などにまいて、今日でいう融雪剤として使ったなどの記述がある。

また、氾濫対象区域の人々が畳などを負担したわけだが、高価品であるため難儀する農民も多く、そのため独力で新設する庄屋や大地主などは村人の尊敬を集めたという話も伝わっている。苦しいなかでも助け合いの精神が古くからあったわけだが、我々は豊かさや便利さと引き換えに、困っている人たちを助けるといった精神（行動）が薄らいでいるように思える。

他にも、例えば平坦地でも、干満の影響で氾濫が規定される場所では、引き水が強く簡単に家が流されてしまうため、戸を開けることで浮力で持ち上げるのを防ぎ、しかも家の中を流れが走って家が流されるのを防ぐ方法をとるところもあった。洪水と戸の関係は、家の造り方や土地の条件によって異なるのだが、良く観察し独自で考え抜いた知恵を使って生活していたのが分かる。これらから水害が当時の人々に与えていた被害や恐怖が想像できる。また水害意識が非常に高かったことも推測できる。

第3項 鶴見川との比較

なぜ鶴見川と比較するかと言うと、鶴見川周辺は急激な都市化で新住民の流入が多摩川よりも激しいため、その新住民が水防意識にどのような影響を与えているかを知るためである。また、水防意識を高める可能性を探る意味でも鶴見川と多摩川の比較を試みる。では、鶴見川について簡単に説明する。

鶴見川は、源流は東京都町田市、河口は横浜市鶴見区の東京湾。町田市、横浜市青葉区、緑区、都筑区、港北区、鶴見区、川崎市幸区を流れる全長 42.5km、流域面積 235km²（大阪市並み）の一級河川で、流域の形がバクに似ていることから「バクの川」と呼ばれ親しまれている。特徴として、水害が起りやすいことが挙げられる。古くから洪水が頻繁に起こっていた鶴見川流域は、市街地化が進んだことで保水・浸透機能が低下し、氾濫した場合の浸水被害のリスクが高まっていた。そこで「総合治水対策」の対象河川となり、整備が進められてきたが、その最たるものが「鶴見川多目的遊水地」である。この遊水地の中に 2002 年の日韓ワールドカップの決勝会場「日産スタジアム」が入っている。鶴見川多目的遊水地は、平成 15 年度から運用を開始している。



図2 鶴見川流域図

(出典. 京浜河川事務所管理区間「鶴見川マップ」を筆者編集)

表5 鶴見川の水害年表 (昭和期)

(出典. 京浜河川事務所ホームページから)

1927 (昭和2)	鶴見川、豪雨で30戸が倒壊
1935 (昭和10)	豪雨により早湊川の堤防が数箇所にわたり決壊。浸水600戸 鶴見川氾濫。大網橋交通途絶
1937 (昭和12)	新田村吉田の鶴見川本流および早湊川で堤防決壊
1938 (昭和13)	豪雨により鶴見川中流で氾濫。床上浸水約4000戸、床下浸水約7800戸の大被害
1941 (昭和16)	大雨のため鶴見川中流で堤防決壊、床上浸水2144戸、床下浸水4593戸、避難民は3000人を越す
1948 (昭和23)	アイオン台風により、鶴見川で国道鶴見橋上下流約10mにわたって決壊
1949 (昭和24)	キティ台風により、鶴見川で2000戸以上の浸水被害
1950 (昭和25)	豪雨のため鶴見川、早湊川合流点本流左岸で4ヶ所決壊。豪雨のため鶴見川合流点本流左岸で2ヶ所決壊
1952 (昭和27)	ダイナ台風により鶴見川、佃野町一帯で160世帯の床上浸水
鶴見川の水害 (昭和30年以降)	
1956 (昭和31)	鶴見川、豪雨で浸水約120戸
1958 (昭和33)	狩野川台風により鶴見川各所で決壊。 決壊に対して災害救助法適用。床上浸水16,991、床下浸水48,766戸の大被害
1966 (昭和41)	台風4号で床上浸水3400戸
1976 (昭和51)	台風17号により鶴見川本支川で水害 (都市災害)

1982（昭和57）台風10号の豪雨により、鶴見川被災 台風18号の豪雨により、鶴見川被災
--

表5で見るように、近年の鶴見川水害の原因のほとんどは、台風性の降雨によるものであることが分かる。

多摩川と鶴見川との治水での大きな違いを挙げると、多摩川には遊水地がないが鶴見川には多目的遊水地があることである。多摩川に遊水地がない理由は、流域に住宅が張り付いており土地が確保できないためである。このため、遊水地だけでなくスーパー堤防や防災ステーション、ダムの確保が非常に困難で整備が不完全なのが現状である。多摩川には利水目的の小河内ダムはあるが、治水目的のダムは未だにない。

現在の鶴見川の水防を京浜河川事務所のホームページやインタビューで調べた結果、多摩川と比べ水防意識が高いことが分かった。

鶴見川流域での水防意識を見る上で忘れてならないのは、防災キャラバンという取り組みである。これは、全国でも珍しい活動で、平成17年からスタートした先進事例である。今の小さい子供たちに向けて必要な水防意識を発信することで、意識を高め災害被害を減少させる狙いがある。

そのため、鶴見川流域に住む人のハザードマップアンケートの回収率が高い。防災キャラバンなどの地道な努力の結果が住民の水防意識を高めているのであろう。私は、新住民の増加が水防意識を低下させる原因なのではないかと考えていたが、やりようでは、新住民の水防意識を高めることが可能だと分かった。

第4項 水防の課題～インタビューから見えてくるもの～

現行制度における、水防における国の役割は警報を出すなどがあるが、そこから先の水防活動（避難所の確保や食糧提供など）は、都道府県や自治体の責任となる。国と都、都と自治体の組織連携が複雑で、さらに自治体から末端組織（住民）までの情報伝達が完全ではないのが現状である。

国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所、防災情報課水防企画係長の斉藤英樹さんにお話を伺ったところ、多摩川は全国的に見れば水防意識が低いことが分かった。江戸時代では、水害（頻度と被害）^(注3)の影響が強く当時の人々は水害を恐れ、また水防意識も高かったと思われる。時代を重ねる毎に、水害の頻度は減少したが被害は決して小さくなかった。特に昭和30年以降多摩の不動産価値は上昇し水害の範囲が小さくても被害は大きかったのである。それに人口密度が高いことも合わさって都市水害は危険が増している。しかし、こうした危険があるにも関わらず、治水技術の進歩や新住民の増加等によって、現在の水防意識は相当低下している。水害を知らない新住民も課題の一つであるだろう。安心できる社会をつくるのは当然だが、我々は過去の苦しさや努力、そして自然の脅威を忘れてはならない。

多摩川はなぜ水防意識が低いのか。安全な川として多摩川が認識されているのはもちろんだが、国が多摩川水防に時間と労力を使えないということが分かった。広いうえに、優先順位を考えると多摩川に人をかけられないらしい。これは、全国の一級河川の水防を公平に行うという観点からみると、多摩川だけに人をかけられない。水防と治水のバランスが大事なのだが、多摩川は国レベルでは水防より治水に重みをおいている。だからといって、多摩川全流域の水防意識が低いわけではない。過去に水害の被害が大きかった地域や、水位が高まり危険を感じていた地域は水防意識が高いことが分かった。これらは、合同巡視の参加度などで分かる。例えば、稲城市、日野市（高幡付近）、狛江市等の上流・中流の意識は高い。多摩川でも身近にできる活動を、水害を知らない若い世代（学生）ができたなら素晴らしいと思う。今回詳しい提案はできないが、水害に恐怖を感じている若者や水防意識の高い若者を大学やサークルで集め、できれば水防団などと連携して鶴見川のように防災キャラバンなどの取り組みや水防情報を大学のサイト、自分たちのサイトで発信できればと思う。

表 6 多摩川と鶴見川の治水・水防比較図

	治水	水防
多摩川	防災ステーションやスーパー堤防（整備不全）	水防演習や合同巡視
鶴見川	多目的遊水地	防災キャラバン→子供たちに向けて水害の怖さなど情報発信 水防演習や合同巡視

第3節 まとめ

江戸時代と比べ、現在では水害の回数はかなり減った。そこには、治水に尽くし活動してきた「人」と「技術」の歴史が刻まれている。その結果、我々若い世代では水害の恐怖や脅威を知らない者が多い。水害が今なお起こる地域を除いて、水防意識がとても低いことに危険を感じる。災害（水害）が起きてしまえば、治水ではなく水防活動になる。川が活着ている限り被害をゼロにするのは不可能である。治水の整備がほぼ整っている多摩川は、安全な川と認識されがちだが、水害は将来必ず起こる。水防などの訓練を怠っては、水害が起きたときの二次災害を食い止めることが困難となり、また自分の手で守れるものも守れず被害が拡大する恐れがある。

国をはじめ人々の意識をもっと水防に向けさせることが重要であり、どう高めるかが課題だと思う。私自身これまで水防の意識がなかったが、今回のインターゼミの活動を通して得た知識を用いて、一人でも多くの若者に伝えていきたい。

注記

注¹ 治水と水防の意味については、後述の第2節・水防の現状と課題を参照

注² 流路延長とは水源から河口までの距離

注³ ここでいう被害とは、被害者数や浸水面積あるいは近代以降注目されるようになる金額換算の価値のみではない。周辺の人々が被ったであろう主観的な（思い出など）被害までも含む

参考・引用文献

- (1) 足柄の歴史再発見クラブ「足柄歴史新聞 富士山と酒匂川」2007年3月31日
- (2) 大内尚樹『多摩川水流紀行 河口から源流まで138キロ』白山書房（1991年5月）
- (3) 大熊孝『洪水と治水の河川史』平凡社（1998年1月）
- (4) 国土交通省国土技術政策総合研究所『実務者のための水防ハンドブック』技報堂出版株式会社（2008年10月）
- (5) 小林孝雄『水恩の人 多摩川治水と平賀栄治』出版文化社（2000年8月）
- (6) 新多摩川誌編集委員会『新多摩川誌』（財）河川環境管理財団（2001年7月）
- (7) 東京消防庁狛江消防署多摩川水防記録編集委員会『濁流に挑む 多摩川決壊と水防活動記録』東京法令出版株式会社（1975年9月）
- (8) 宮村忠『水害-治水と水防の知恵』中央公論社（1985年6月）
- (9) 渡辺一二『図解・武蔵野水路～玉川上水とその分水路の造形をあかす』東海大学出版（2004年）

参考URL

京浜河川事務所ホームページ

(<http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/office/index.htm>)

第2章 民話に見る多摩の生活意識

経営情報学部 20911344 山田真里帆

はじめに

本論文は、近代以前の多摩圏の人々の生活意識や心情を多摩に伝わる民話から探るものである。多摩学において多摩地域のローカリティを知るにあたり、人に焦点を当てれば多摩という地域がわかるのではないかという仮説をたて、その手段として民話を研究することにした。民話には、当時の人々の暮らしの様子や出来事、関心があったことが記録されている。時代もさまざまである。そこから、代々受け継がれている多摩特有の人々の生活の特質を見出すことが本研究の目的である。

そこで本論文においては、多摩の民話を集め、あるカテゴリーにおいて分類し考察することで、多摩圏住民の特質・傾向を抽出した。

第1節 多摩の口承文芸

主に西多摩・南多摩を中心に青梅市・西多摩郡・立川市・昭島市・町田市・稲城市・日野市・八王子市の口承文芸を文献により収集した。昔話としてストーリーがしっかりしているもの、世間話や噂などを書き起こしたものなど、色々な民話が存在した。伝えたい事柄がはっきりしているものと、ただあったことを不思議だから・面白いからと伝えられたものがあった。すべての口承文芸から意味を紡ぎだすのは難しいが、当時の人々の考え方や生活意識を見出すためには、伝承理由を考察することが必要である。

まず、市区町村ごとにまとめた口承文芸や民俗についての文献などから収集した、民話の概要を記す。

表1 収集した民話の概要一覧

No.	物語名	場所 時代	あらすじ
1	光仙婆さん	稲城(坂 浜の小 田良) 明治時 代	坂浜の小田良という谷戸に、光仙婆さんの祠がある。全国修行の尼僧が、咳がやまないというたちの悪い風邪にかかり、村人の看病もむなしく死んでしまふ。それから誰いうともなく、百日咳にかかったときには、尼僧を葬った祠にお茶をあげて、そのお茶を持って帰り病人に飲ませると必ず治ると言われるようになった。霊験あらたかと評判になるにつれ参拝者も増え、百日咳の神様と呼ばれるようになった

			た。そうして治ったときには、お茶をもらってきた時の茶わんと新しい茶わんを祠に供えるという風習が広まった。
2	コン友さん	稲城	<p>村一番の狐とりの名人である友次郎という人がいた。彼は鉄砲ではなく網や罟、捕獲箱などでとった。村人たちは「コン友さん」と呼んで尊敬していた。利口な狐を捕まえるのは、狐との知恵比べだと言われた。狐をとる方法は、狐の好物のねずみを油であげて、日暮れの頃、山道や畑の畔をひいて歩き、家の近くまでおびき寄せる。ついてきた狐をしかけてあった捕獲箱に誘い込むが、入った狐は猫のような声をだして人をだまそうとした。また、網を使うときはムツウ網^(注1)を使って、狐が網に入った時に引縄を引いてとらえた。しかし、利口な狐は最初に引縄を喰いちぎってしまい、網の端のほうで安全なことを確認してからえさをとった。なのでコン友さんは引縄を2本用意して、うち一本を土にうめておいたらしい。</p> <p>狐とりの目的は毛皮で、傷がつかないよう原始的なとりかたをした。たくさんいた狐も、コン友さんにとりつくされてしまったという。</p>

3	孝子長五郎	稲城(押立村) 江戸時代	<p>押立村のある農家に長五郎という子供がいた。長五郎の家は大変貧しく、田畑が持てないので日雇いで暮らしていた。長五郎は両親が働きに行っている間に、家のことや隣近所の手伝いなどをして両親を助けていたので、親孝行息子と言われていた。雨上がりの日に、おつかいに行くことになった長五郎に、母親は道は乾いているからぞうりを履いて行けと、父親はぬかっているかもしれないからげたを履いていくように言った。長五郎は悩んだが、水溜りのところはげたで、乾いているところはぞうりで歩くと言って、片方ずつ履いて出かけた。長五郎が6歳のとき、父親が亡くなり生活はより苦しくなった。そのため姉が結婚して生計をたてることになったが、長五郎が14歳のときに姉夫婦が2人とも病死した。長五郎は、母とともに農作業を行い、合間に薪売りなどをしてきた。成人して2回結婚した長五郎だが、2人とも病死してしまった。再婚の話もあったが、母をおろそかにするかもしれない人とは結婚できないと、断った。そうして貧しい生活をしてきたが、80歳を超えた酒好きの母のために、薪売りのついでに必ず酒を買い、夏の夜も冬の夜も、自分のことよりも母親を優先してきた。長五郎の親孝行の話は評判になり、江戸幕府まで伝わった。幕府は庶民のお手本だとして、ほうびに銀貨20枚と新田の開墾料を与えた。長五郎は与えられたお金をもとに、一生懸命新田を開墾した。それから押立の地域には、しだいに新田が増えていき、豊かな村へ変わった。長五郎が開墾した水田は「孝子面」と呼ばれ、長く人々に伝えられた。</p>
---	-------	---------------------	--

4	観音さまになった馬	稲城	<p>ある農家に太郎という年をとった馬がいた。畑仕事も思うようにできないほど弱っていた。売りに出されても仕方がないが、長年飼っていて家族同然で、飼い主は手放す気になれなかった。主人である茂作は、好人物だがばくち好きで、めったに勝てなかった。ある日ばくちで負けてきた茂作は、太郎に愚痴をこぼした。すると、太郎は野良着の裾を引っ張って、ばくち場へつれていった。これはもう一度やれと言っていると思った茂作は、またばくちを始めてしまった。丁か半か迷っていると、太郎が外で足音を鳴らして、茂作に助言した。その助言通りに賭けると、必ず当たった。そうしてそれまでの負けも取り返して帰って、勝ったお金で太郎に好物のにんじんをたくさん買って与えた。ところが、にんじんをやりすぎたせいか、太郎は熱を出して死んでしまった。茂作は家族と別れた時のように悲しみ、丁寧に葬り、馬頭観音の石仏をたてた。それからは好きだったばくちをやめ、朝晩に必ず馬頭観音に祈り、一生懸命働いた。村の中ではばくち好きが直らないときは馬頭観音にお願いすれば直るといふ噂がたった。</p>
5	河童	稲城(長沼村) 江戸時代	<p>長沼村に、甚蔵という村一番の泳ぎの名人である若者が住んでいた。夏も終わりの夜、小さな小僧さんが訪ねてきた。小僧さんは甚蔵に、家の入口につかえている邪魔なものを、自分ではできないので甚蔵に取り除いてくれと頼んだ。可哀想に思った甚蔵は小僧さんの後について行った。すると、多摩川浦という、魔の淵と恐れられている底も知れない淵についた。小僧さんがついてこいと飛び込むと、甚蔵も不思議な力に引き込まれるように飛び込んだ。小僧さんについて潜っていくと、底に小さな洞穴があり、穴の入口になにかつかかえていた。小僧さんがそれだと合図するので、何度も力いっぱい引っ張って、それを取り除いた。それを持って淵から上がって見てみると、古い馬の鞍だった。ふと気がつく、そこには誰もいなく、寒気がし、夢だったのだろうか。次、家に帰った。次の日、甚蔵が仕事から帰ると入</p>

			<p>口に新鮮な魚が葉っぱのお皿に乗っていて、それから毎日魚が届けられた。しかし、村の人々に聞いても、誰がいつ置いて行ったのか、見た人はいなかった。しばらくして秋の洪水が起こると、魚は届けられなくなった。それから数十年たったある日。甚蔵が奥多摩にある御岳神社にお詣りに行ったとき、御岳山のふもとの多摩川にかかった橋を渡っていると、向こうから小僧さんが近付いてきて、昔大変お世話になった、おかげで家に入れたが、洪水で流されて住めなくなってしまったのでご無沙汰になってしまった、御達者でといい、川に飛び込んで消えてしまった。甚蔵は、小僧さんは河童だったのだと納得しました。昔から、魔性のものは黄金にてを触れることができないといい、鞍についている金具に触れないので、小僧さんは取り除くことができなかったのだろう。</p>
6	丸石稲荷	稲城(坂浜の小田良)	<p>坂浜の小田良というところのある家の庭先に丸石稲荷という石仏がある。この石仏は昔から裏の田んぼの真ん中であって耕作の邪魔になっていた。ある年に掘り出して漬物石にしたところ、毎晩のように石から音がするので、元の場所に埋めなおした。何年か後に、別の人が掘り出して家の前に置いたが、やはり夜になると鳴くので、何かのたたりがあるのかもしれないと、石のところに祠を作って「丸石稲荷大明神」としてまつたところ、鳴かなくなったという。</p>

7	お福ヶ谷戸	稲城(矢野口村・東長沼)	<p>矢野口と東長沼の境にお福ヶ谷戸という谷戸があった。昔は人家はほとんどなく、山の中には狼がたくさん住んでいた。村の若夫婦の家に、お福という大変可愛い赤ん坊がいた。夫婦は大切に育てていた。ところが、ちょっと目を離したスキに、狼が赤ん坊をくわえて逃げていった。近所の人々が後を追ってみると、恐ろしいことに狼は赤ん坊を自分の子供に食わせていた。両親は深い悲しみにくれ、後悔し、狼になんとかして復讐できないか考えていた。数日後、村はずれの山に、山仕事に出かけた。谷底の道を歩いていると、道の真ん中でちょうど生まれたばかりのような狼の子供がうごけなくなっていた。谷の上には親狼が威嚇しつつ睨んでいた。夫婦は自分の子供を殺したのはあの狼に違いないと、親狼が見ているのを知りながら、狼の子供をなぶり殺しにしてしまった。親狼は牙を鳴らして見ていたが、様子を見ながら、ただ悲しそうに鳴いているだけだった。子供を失った両親の怒り、悲しみが狼に通じたのかもしれない。狼が住んでいた谷戸は「お福ヶ谷戸」と呼ばれ、村人たちの記憶に残った。</p>
8	舌をぬかれたお獅子	稲城(大丸)	<p>大丸では豊作を願う風祭を、獅子を出し盛大に行っていた。祭りが終わると、獅子頭は円照寺の土蔵に納められた。ある年の夏、雨が少なく猛暑が続き、井戸水まで枯れるありさまだった。円照寺のわきには大きな池があり、寺の水田に使うための池で、どんなに雨が少なくても枯れることはなかった。ところがその年は、夕方にはいっぱいだった池の水が朝になると完全に干上がるという不思議なことが何日も続いた。おかげで稲は弱り、あと数日で枯れてしまうのではないかと心配された。和尚は不思議に思っ、池のそばで水番をすることにした。夜が更けてきても何も起こらず、疲れのせいで眠り始めてしまった。その時、一陣の風に起こされた和尚が岸の向こうを見ると、土蔵から抜けだしてきた獅子三頭が水を飲んでいて、和尚は寺男を呼び、道具箱から大きなくぎ抜きを持って戻ると、2人で獅子に襲い</p>

			かかり、縄で縛りあげると、くぎ抜きで獅子たちの舌を水が飲めないようにと抜いてしまった。それ以来、池の水はどんな日照りでも枯れることがなくなった。
9	清水窪の小豆婆さん	稲城(平尾)	平尾の清水窪 ^(注2) と呼ばれるところに、小さな土橋がかかっていた。人家もなく寂しいところで、雨の降る夕暮れ時には人っ子一人通らず、小豆婆さんがでてきて小豆をとぐと怖がられていた。小豆を研ぐ音が雨音に混じり橋の下から聞こえてきて、流れる川の水も赤く染まったという。子供たちは本当のことだと信じ、怖がった。このあたりは庚申塔や經典供養塔がならび、墓地、狐山が続く。その奥には昼間でさえ暗い森がある。大人でも通るのが気味悪かったのか、夜には怖さを忘れるために歌を歌ったため、どこからともなく歌声が聞こえてきたという。
10	婆塚橋	稲城(坂浜) 明治時代	ある夏の日、急に雷がとどろき、大雨が降る中、黒川方面から急いで歩いてくる一人の女六部 ^(注3) がいた。三沢川の支流の上谷川は水かさが増し、ものすごい勢いで流れ、橋が今にも流されそうだった。女六部はよほど急ぎの用だったのだろう、橋を渡り始めた。その時、上流から丸太が流れてきて橋にぶつかり、橋は壊れ、女六部も流されてしまった。この様子を見ていた村人は、人を集めて川の中を探したが、流れが速くてなかなか見つからず、三沢川の本流のあたりで柳の木の株にひっかかって死んでいる女六部を見つけた。村人たちは橋の傍らに塚を作り、懇ろに葬った。塚には2本の松を植えたが、松は大木となり、坂浜の二本松と言われ有名になり、橋も婆塚橋と呼ばれるようになった。その後、明治30年ごろ悪疫が流行したとき、婆塚橋の婆さんがたたったと噂になり、婆塚婆さんの供養をすることになった。寄付金を集め、石碑をたてたところ、悪疫はしだいに治まり、石碑を川上神社と崇めた。この神社は大正15年、坂浜の天満神社に合祀された。

11	雁追橋	稲城(東長沼) 江戸時代	<p>東長沼の津島神社の近くの用水路に雁追橋という橋があるが、この橋には昔から一つの由来がある。江戸時代の頃、大変美しく気立てのいい女性が住んでいた。御殿女中^(注4)だったが、何か理由があつてこの地に移り住んでいた。村中の男たちは気を引こうとしたが、大変貞淑な人ですぐに帰されてしまった。その頃の稲城には多摩川のほとりにたくさんの雁が来ていた。この雁にたとえて、雁と同じように男たちが集まってくるがすぐに追い返されてしまうと言つて、そのうち女性を「雁追婆さん」と呼び、橋の名前にもなった。</p>
12	道陸神	稲城(平尾・金程)	<p>昔から、お正月には「塞の神」、または佐義長、どんど焼きと呼ばれる1月14日に行われる、いわゆる儀式が楽しみとなっていた。お正月の門松やしめ飾りを集め、竹で円錐形の小屋を作り、夕方火をつけて燃やし、1年の安泰や豊作を祈るのだが、そのとき中には道陸神と呼ばれる丸い石をまつた。塞の神が終わった後、ご神体である道陸神を盗られないように、土の中に隠しておくのが慣わしだった。^(注5)</p> <p>ある年、この道陸神が盗まれた。村中探しても見つからず、何十年かが過ぎてしまった。平尾の隣村の金程に直吉という男が住んでいた。ある年の正月、親戚の家へ年始のあいさつに出かけたまま行方不明になってしまった。家の者や近所の人心配して探し回ったが、栗木の親戚の所へ立ち寄った後、神がかりにでもあったように消えてしまった。女房すえは嘆き悲しみ、神仏に頼むしかない、行者に占ってもらおうと、直吉は生きているが、若いころ神仏の御心にそむく行いをしたせいで道に迷い遠方をめざして歩いている、よく信心をして祈れという。それからは朝晩神仏をまつり、祈り続けた。何日か過ぎたある日、すえは不思議な夢を見た。古い大きな杉の木が生い茂る暗い山の奥で、杉の木の上には数えきれないほどの天狗が枝から枝へ飛び渡っていた。霧の中にぼんやりと見える直吉に呼びかけるが、気付かずどんどん向こうへ歩いて行ってしまうという</p>

			<p>ものだった。そんなことがあって4、5日後、直吉は帰ってきた。直吉は、行方知れずになってからのことは一切覚えておらず、気吹いたときは神奈川県の大雄山最乗寺で、それでもまださめきらず、町田にたどりついたときようやくはっきりと気がついたという。それから間もなく平尾のお地蔵さまの足元に道陸神がまつられていたという。</p>
13	ムジナ小僧	稲城(平尾)	<p>秋も終わりのある晩のこと。7つ8つの小僧さんが、修広寺のおつかいで平尾の家を一軒一軒まわっていた。そして最後に一番奥に住むお婆さんんの家に着いたときには日が暮れて真っ暗だった。お婆さんは心優しい人で、疲れ切った小僧さんを家に泊めてあげることにした。雨が降ったりやんだりの寒い日で体が冷えているだろうと、先にお風呂に案内した。夕飯の準備ができて、もうそろそろ上がってきてもよいはずなのになかなか上がってこないの、呼びにいくと風呂場には一匹のムジナ^(注6)が風呂桶のふちに乗っかって尻尾でお湯をかきまわしていた。捕らえようとする、ムジナは山の中へ逃げて行ってしまった。</p>
14	神がかりの童子と天神さま	稲城(矢野口村) 鎌倉時代	<p>鎌倉時代の初め頃に、多摩川で大洪水があった。大雨で水量はどんどん増し、濁流となり、堤防や橋を押し流した。毎年の洪水で流路が変わり耕地が流されてしまうので、百姓たちは困っていた。矢野口村の百姓たちが小高い丘の上から眺めていると、12、3歳の童子がわめきながら半狂乱のように現れ、百姓たちに向かってうしろの山に社をたて天神天満をまつれば百日の間に必ず靈験があると叫び、倒れた。童子は神がかり^(注7)となった。百姓たちは半信半疑だったが言われたとおりにした。すると洪水はみるみる治まり、そのあとに広い空地ができた。百姓たちは喜んでそこを耕し、5町ばかりの耕地を作った。それから洪水は少なくなり、米作りで繁栄し、豊かな農村となった。</p>

15	高勝寺の観音さま（坂浜の一番鶏）	稲城（坂浜） 明治時代	<p>今はもうないが、坂浜の於部屋というところに妙福寺という真言宗で本尊として木造の観音さまがまつられている寺があった。大変さびれた寺で、あちこちで雨漏りしていて、修理したくても貧しい村のため、なかなかできなかつた。雨漏りはしだいにひどくなり、観音さままで濡れるようになってしまったので、観音さまを修理するため浅草の塗師のところへ塗り替えにだした。一か月ほどして、塗り替えができる約束の日がきた。村人たちはみんなで行くことにしたが、かなりの距離があるので一番鶏がないたらで出かけることにした。ところが、いつもは午前2時3時に鳴くはずの一番鶏が、その日に限って晩の9時ごろに一斉に鳴きだした。農家には時計ではなく時間を知る術がなかつたので、何の疑いももたず出発した。浅草に着いてもまだ夜明けにもならなかつた。塗師の家はまだしまっていたが、観音さまを受け取り、大事に抱えながら持って行った。九段坂の上まで来た時、ようやく空が明るくなりはじめ、一休みしていると火事を知らせる半鐘の音が聞こえてきた。しばらく見ていると、浅草のほうから火の手が上がり、みるみる燃え広がっていった。一行は帰り道を急いだ。みんなで修理した本堂のなかで観音さまは光り輝いていた。十日ほどたって、あのときの火事が塗師の家だったこと、塗師が欲深な人間で、観音さまのなかからおはらごろもという純金の玉を抜き取っていたことがわかり、観音さまが罰を与え、はやく帰るために一番鶏を早く鳴かせたということだ。噂は村中に広まり、いっそう信仰をあつめるようになったが、その後妙福寺は廃寺となってしまったため、近くの高勝寺に移され、長く信仰された。</p>
----	------------------	--------------------	--

16	狐のいたずら	稲城(平尾)	<p>平尾団地がまだ山や畑であった頃、山の北側の斜面には、たくさんの狐の穴があり、鶏を襲ったり、玉子をとったりしては村の人々を困らせていた。秋から冬にかけて、狐が子育てをする頃には赤ん坊の肌着やおむつがよくなかった。そんなとき、赤ん坊はよく夜泣きをしたという。狐の仕業が赤ん坊に通じたと村の人々は言った。あんまりいたずらが過ぎると、村の人々は地主に相談に行った。地主は狐山へ出かけて、狐の穴に向かって、いたずらが過ぎるとこの地所においてやらないと叫んだ。するとしばらくはいたずらをしてこなかったという。村でなくなりものがあると、まず狐山へ探しに行ったそう。穴の入口には狐の子供がおもちゃにしたり、獲物をとる練習にしたのであろう、噛み切られた下駄の鼻緒などが散らかしてあったそう。</p>
17	馬とドロボウ	稲城	<p>昔の農家では、馬を家族のように大切にしていた。そのため家の隣に馬屋を作って世話をした。ある時、馬屋口から泥棒が入った。泥棒は家の中を荒らしまわり、家財道具をひとまとめにして運び出そうとした。するとどこからか、「俺は今日米を運んだら死んでいく身分だ。色々なくなって、俺までいなくなったら主人が可哀想なので置いていってくれ。」という声がする。しかしあたりには馬しかいない。不思議に思った泥棒は、盗んだものをそこにおいて、その日一日中様子を見ていた。主人が馬に米を積んで運んで行き、帰ってくると、馬は大変疲れた様子で、その日の夜には体調が悪くなり、死んでしまった。昼間に聞こえた通りになって、泥棒は馬がしゃべったにちがいないと、逃げてしまった。それから誰いともなく、馬を飼っている家には泥棒は入らないと言われるようになった。</p>

18	鳩に化けた天狗さま	稲城	徳さんという鉄砲撃ちの名人がいた。鉄砲を構えずに腰弾丸 ^(注8) で命中させることができるほどの腕前だった。ある日徳さんは鉄砲を持って寝鳩を撃ちに行った。いつも鳩が巣にしている大杉山の杉の下で待っていると、一羽の鳩が帰ってきて枝にとまったので、一発撃った。ところが鳩は驚きもせず、徳さんをみているので、もう一発よく狙って撃った。それでも鳩は落ちも逃げもしないので、不思議に思ったが、当たらないはずがないともう一発撃った。しかし鳩は平気な顔をして枝にとまったままで、よく見ると徳さんを睨みつけていた。その時、徳さんはその日が1月17日で、山の神の日で、天狗さまが鳩に化けて現れたと気付いた。そのとたん寒気がして震え上がった徳さんは、急いで家に帰ったということだ。
19	青龍にのってあらわれた妙見さま	稲城(百村) 江戸時代	百村の妙見尊では、毎年8月7日に「蛇より行事」が行われる。青ガヤをより合わせて大蛇を作り、無病息災を祈る。江戸時代初め頃 ^(注9) 、疫病が大流行した。村人たちは、妙見尊に伝わる妙見さまが青龍に乗って天下ったという言い伝えをもとに、青龍を作っておまつりすれば疫病を防げると考えた。村のあちこちに生えている青ガヤを刈り、より合わせて大きな龍を作り、妙見山に村人総出で担ぎあげた。村人たちの祈りによって疫病は流行らず、静かな村に戻った。
20	渡し場の力石	稲城(矢野口村)	むかし、矢野口の渡し場への降り口の土手の上に、力試しの石が二つ置いてあった。どちらの石も90キロ余りの大きな石だ。休みの日になると若い衆が集まって力比べをした。担げるものや頭の上にかざすことのできるのはほんの数人だった。ある日、菅の法泉寺の坊様が渡し場から上ってくるのを見て、若い衆の1人が、石を担いで休まずに寺についたなら石をやるといった。すると坊様は法泉寺へと続く長い上り坂も平気で登り、寺の中まで石を運んだ。あとからついてきた若い衆たちはびっくりして冗談だから返してくれと謝ったが、坊様は怒って、坊主

			騙せば七代たたるということを知らないのかと怒鳴り飛ばした。若い衆たちは村に帰って村役人に相談し、村役人総出であやまってやっと返してもらった。
21	狐火	稲城	狐は穴に住む動物だが、穴を掘るのは下手だといわれる。しばしばムジナの穴を横取りにした。ムジナは穴掘りがうまく清潔な動物で、糞尿などはムジナの溜め糞といって巣よりも遠く離れたところに集めてあった。賢い狐はうまくその習性を利用して、ムジナの留守中に穴にはいり、糞尿を垂れ流し、ムジナが悪臭に耐えきれず出ていくとその穴を棲みかにした。狐の交尾期は春先で、このころになるとよく狐火を見ることができた。夕闇のころ赤い火と青い火が燃えては消え、点々と十数か所も並んだかと思うと、一瞬に消える。狐火のですところは毎年決まったところで、明治の中ごろまでは見られたという。
22	首なし地蔵	稲城 江戸時代	稲城の里へ上州の勝という博徒がやってきた。多摩地方は昔から賭博の盛んなところで、農村ではよく賭場が開かれた。勝のせいで稲城の賭場は荒された。そこで賭博好きの百姓の1人がなにかおまじないでもしているのかと勝に聞くと、道端の石地蔵の頭か体の一部を石で欠いて破片を財布の中か腹掛のどんぶりの中に入れておくという秘伝を教えてもらった。その通りにすると、その日は大当たりで、それまでの負け分を取り戻してしまった。お人よしなその百姓は、仲間の一人にその話をしてしまい、しだいに村中に広まり、あちこちのお地蔵さんは割られたりして、稲城周辺には五体満足な石地蔵がほとんどなくなってしまったそうだ。
23	台の藪の樗	稲城(平尾台)	平尾台原の山王大権現の向かいの台地に台の藪があり、樹齢百年を超える老木がうっそうとしていた。藪の中には杉・檜・榎・樗・檜・榎・桜・山茶花・真竹が生えていて、竹は「竹たが」や「ものさし」などの材料に切り出されていた。なかでも、三本の樗は樹齢数百年を超えるものだった。この樗があるとき急に唸りだした。唸るのは夜だけで、三本のうちの一本だけで、樹の幹をたたくとびたりと唸り声

			<p>はやんだ。オバケ樫の話は村中でうわさになり、日暮れが迫ると樫の下に大勢の人が集まるようになったが、そんな時には唸り声は聞こえなかった。そして誰もいなくなるとまた唸りだす。ある日、この樫を探検することになったが、数人の大人が抱えるほどの大木なので、登るのも容易ではなく、杉の長い丸太を立てかけてそれを登り樫の小枝にとりつくことになった。少しずつ登っていくと、枝に覆われて下からは全く見えなくなった。そこには誰も知らない大きな空洞があった。このとき、空洞の中から茶褐色の二羽の鳥が飛びだしてきて逃げて行った。ミミズクのようなようだった。空洞の中はきれいで、鳥の巣になっていたが卵もひなもいなかった。それから二度と唸り声は聞こえなかった。それから十数年後、藪は切り開かれ、明るくなった。三本の樫のうちの一本が、杉山神社の改築にあたって献木され、拝殿の向拝の材料となった。</p>
24	大丸村の夜泣き石	<p>稲城(大丸村)</p> <p>明治時代</p>	<p>現在の多摩火工廠跡地の奥の森の中に、沢が3つ落ち合って滝のようになっているところがあった。この滝はドンドンと呼ばれ、村の人たちが山仕事に行ったときの水飲み場になっていた。ある百姓がドンドンで土台石にちょうどいい石を見つけ家に持ち帰って家の土台石^(注10)として使った。だが夜になると石から泣くような訴えるような声が毎晩聞こえてくるようになった。たたりがあったら大変なので、翌朝元の所に返しに行った。するとドンドンにはもう1つ同じ大きさの石があった。2つの石は夫婦石で、1つの石が離れたので、悲しがつて泣いたのだろうといわれる。</p>
25	子供にとりついた狐	<p>稲城(坂浜村)</p>	<p>ある家の子供が原因不明の熱病にかかって寝ていた。ある日突然起きだし、障子の棧を渡って歩きだしたので、家の人には狐に取りつかれたと思い、祈祷師に拜んでもらった。しかしなかなか効き目は現れなかった。ある時、狂ったように家の人を呼び、中野^(注11)が火事だから早く助けに行けといった。中野には子供と仲良しの友達がいるので夢でも見て騒</p>

			<p>ぎ出したと思ったが、そのうち半鐘が鳴り出し、本当に火事であることがわかった。家族は子供が不憫で、御嶽神社の御師に頼みに行った。御師はお犬様を連れて、神棚に向かってお祓いをしたあと、お犬様の縄を解放すと、お犬様は牙をむき出しにして吠えながら寝ている子供の布団の周囲を走り回り、家の中から馬屋のほうまで狂ったように吠えまわった。子供についていた狐の霊はやっと離れ、4、5日死んだように眠ったあと、元気になった。その後80歳を超えるまで長生きしたそうだ。</p>
26	天狗の腰かけ杉	青梅 御岳山	<p>御岳神社から奥の院に向かう参道の少し先に、大きな杉の木がある。その木の下枝は巨人が腕を曲げたように曲がっていて、いくら直そうとしても元に戻ってしまう。なにか魔物の仕業ということになり、2人の男が見とどけに来た。やがておそい月がのぼり、あたりが明るくなった。すると、山の上のほうからザワザワと怪しい音が聞こえ、それと同時に大きな鳥のように、顔の真っ赤な鼻の高い天狗が羽うちわをかざしながら飛んできた。天狗たちは山を見回っている様子で、そのうちの1人が例の大杉のところに戻ってきて、まがった枝に座り、月を見ながら一休みした。大杉の枝は天狗の休み場所だったこと、天狗が毎晩山の見回りをしていることを知った2人は、道に這いつくばって天狗を拝んだ。</p>
27	天狗笑い	青梅	<p>ある日、御岳の御師のところに1人のきこりが、山で杉伐りをしていたら天狗がでてきて笑うので気味が悪くて不安だから出てこないように拜んでくれと飛び込んできた。御師はすぐに拜んでやった。すると、やっと天狗は出てこなくなったそうだ。また、ある朝きこりが御岳山に登っていくと、どこかで木を伐っている音がするのに誰もおらず、天狗が出てきて、また笑うのではないかと思っていると、案の定山の上のほうで笑い声がしたそうだ。</p>
28	天狗の夜まね	青梅	<p>むかし、家を建てる時には土台を固めるため土つきをしながらドウヅキ唄^(注1 2)をうたった。ドウヅキは何日もかかり、単調な作業のため、少しでも作業を</p>

			<p>楽しくするために、いろいろ即興で歌われた。このドウヅキがあった日、御岳神社の山のほうから毎晩のように「よいこのさんさ・・・」という声が出た。天狗様が夜まねをしていると言われた。</p>
29	天狗のうでい	青梅	<p>山にはうでいとよばれる天狗のとまり木^(注13)がある。このうでいをきこりが間違えて伐ったり傷つけたりすると、たいてい怪我をされると言われている。</p>
30	のぞき岩の天狗	青梅 (沢井)	<p>ある日、沢井の横尾子の山の中できこりたちが杉伐りをしていた。夕方、仕事を終えて山を降りはじめ、のぞき岩という見上げるばかりの大岩の下を通りかかった時、源さんと言う人が岩の上に白い服を着た真っ赤な顔の大男を見たとき叫んだ。仲間たちが見上げた時には誰の姿もなく、源さんの言うことを信じなかった。みんなが信じないので、確かめてくるというと、仲間が止めるのも聞かず大岩に登り始めた。もう少しで登り切れそうなどころまで行った時、岩が崩れ滑り落ちてしまった。仲間はおんな高い所に人がいるわけないと叫んだが、源さんはあれは天狗だったと、足の骨を折る大怪我をしながらも言い張った。天狗を見たおかげか、源さんは百歳近くまで長生きしたという。</p>
31	川天狗	青梅 (沢井)	<p>むかし、沢井の多摩川で投網うちで魚捕りをしている男がいた。名人と呼ばれるほどで、いつもたくさん魚を捕っていた。ある日、ヤマメやハヤをびく^(注14)いっぱい捕り、帰ろうとしていると、後ろで水音がした。誰かいるのかと声をかけ、音のする方を見ても、誰もいない。空耳かと思い、びくを持ち上げると、たくさん入っていたはずの魚が一匹もいなくなっていた。川天狗様にやられたと、男は座り込んでしまった。あまりたくさん魚を捕るので、怒って取りかえたのだそうだ。</p>
32	送り狼	青梅 (御岳山・沢井)	<p>むかし、御岳山には狼がいた。「カヤー一本千匹隠せる」といい、狼が利口ですばしこく、カヤー一本でも身を隠すことができ、どこで聞いているかわからないので狼の悪口を山で言うものではないとされた。また、送り狼といい、狼は人が参道を歩いていると</p>

			<p>付いてくることがある。そういうときに転んだりすると襲われるので、なにがあっても普通の足取りで歩いて帰れといわれていた。</p> <p>沢井の中風呂に、釣り好きの三吉さんという人が住んでいた。ある初秋、三吉さんは御岳の一の鳥居の下の河原ですくい網をし、夕方に川辺の道を帰っていた。しばらくすると、うしろから誰かが付いてくる音がする。振り返っても声をかけても誰かがいる様子はない。これがうわさに聞いた送り狼かもしれないと思った三吉さんは、狼はタバコが嫌いだと聞いたのを思い出し、タバコを吸い始めた。すると足音はぴたりとやんだが、タバコがなくなってしばらくするとまた足音が聞こえてくるので、またタバコに火をつけ、ずっと吸いながら家に帰った。</p>
33	狼の骨	青梅 (平溝・御岳村)	<p>平溝の井上さん宅には、日本狼の頭骨^(注15)が残されている。むかし、御岳村にひとりの法印^(注16)が住んでいて、狼の骨を火であぶって御祈祷をしたり、骨を削って病人に飲ませて治療していた。狼の骨は、主に神経性の病気に効き目があるといわれている。また、キツネツキ^(注17)のキツネを追いつぶすのに使われた。キツネツキの出た家では、狼の骨を借りてきて神棚に上げ、拝むとキツネが出て行ってしまったという。</p>
34	二間の岩の狼	青梅 (沢井)	<p>むかし、沢井の山奥で数人のきこりが木の伐採をしていた。山の中に仮小屋をつくり何日も泊まり込む大仕事だった。ある日、一番若い孝平さんが伐った木をおろしていると、りん^(注18)の上に猫とも犬ともつかない動物が乗っていた。青光りする目でじっと孝平さんを見ていたので、気味が悪くなって思わず石を投げつけた。すると動物はりんから降り、下にある二間の岩と呼ばれる大岩のかげに走りこんでしまった。その夜、きこりたちは仮小屋で、いろいろを囲んで酒を飲み、談笑していた。夜も更けて寝ようとなったとき、ものすごい音とともにランプの明かりもいろいろの火も消え、仮小屋は山の斜面から落ちそうになるほど揺れた。きこりたちは逃げることも</p>

			できず、ふとんをかぶって震えているばかりだった。夜が明けると騒ぎは嘘のように収まっていた。年寄りのきこりが、孝平がかまったのは二間の岩に住む狼で、狼をいじめるとたたりがあるといった。きこりたちは狼をかまわないことを肝に銘じたという。
35	御岳山のお犬様	青梅	むかし、日本武尊は、東方の民俗を征伐するために関東にきていた。尊は御岳山の上に陣を置き、東国を平定された。あるとき、御岳山から山伝いに西北に向かおうとすると、白い大鹿が現れた。大鹿は、目を光らせ、剣のような大角をふりたてて山道をふさいだ。尊が家臣に命じて占わせると、大鹿は山鬼の化身であるとでた。尊は、そばにあった山ビルを捕ると、大鹿に投げつけた。山ビルは大鹿の目にあたり倒れたが、同時に地鳴りがし、白い霧が湧き上がってきた。霧は煙幕のようになり、一寸先も見えなくなってしまった。そのとき、霧の中から一匹の白い狼が出てきた。狼は尊の前に立ち静かに見上げ、ついてこいというように霧の中を振り返り振り返り進むので、神の助けとついていくと、霧から抜け出すことができた。尊は白狼に感謝し、御岳山に戻り本陣を火災・盗難から守るよう命じた。白狼は頭を下げると御岳山にむかって走り去った。これが御岳山の火災・盗難の守護神「お犬様」だそうだ。
36	猪とらさん	青梅 (日の出村)	とらさんは、日の出村に住む狩人で、猪取りの名人なので猪とらさんと呼ばれていた。ある秋、とらさんは御岳山に登り、狩りをしていたが、なぜかウサギ一匹捕まらなかった。しかたなく富士ヶ峰の丸山というところまで帰ってくると、杉木立の下に墓地があり、墓石のかげに一匹の狼がうずくまっていた。とらさんは狼を標的にし、鉄砲を構え撃つと、狼に命中した。しかし、墓石だとおもっていたまわりの石が狼に変わり、猪とらさんをにらんでいた。猪とらさんは御師の家に駆け込んだが、そのとたんものすごい山鳴りが始まった。御師にわけを話すと、狼は山の守り神、それを鉄砲で撃って怒りを買ったのだから、狼をねんごろに弔って、怒りをしずめても

			らおう、という。二人は急いで狼を弔い、御師は山を鎮める祈祷を行った。するとだんだん山鳴りは収まったという。
37	キツネ火	青梅	むかし、背中に小さな箱を背負った「トミ売り」のおじいさんがきた。トミを買って神棚にあげておくと銭がたまるといふ。あるはた屋にもきたが、おかみさんはおじいさんに不吉な胸騒ぎを感じ、トミはもういるからいらぬといつて追ひ払つた。はた屋には、トミという女中がいた。その夜、はた屋のうらの竹やぶにはかぜの神様というのがあり、お参りに来ていた近所の人、狐火が見えると飛び込んできた。外に出てみると、向かいの山から右の家まで火がつづいてた。赤い火はついでに消え、消えてはつき、一町 ^(注19) も続いている。それからまもなく、その家では景気が悪くなった。トミを買つたそう。村のキツネツキだといわれていた子供が言うには、トミはキツネのことだそう。
38	かんざし盗人	青梅	ある日、嫁入り行列 ^(注20) があつた。花嫁は黒地に花模様の着物、髪は高く結い、花かんざしやこうがい ^(注21) をつけていた。二ツ塚峠を越えた時、花嫁のそばに付き添つていた仲人が、さっきまでつけていたはずの花嫁のかんざしとこうがいがないのに気付いた。峠にはキツネがよくでるといふことだったので、キツネのいたずらかもしれないと、共の人たちが急いで峠の頂まで引き返してみると、道の傍らにかんざしとこうがいがかかれていたといふことだ。
39	ミミズのうどん	青梅	むかし、山仕事を終えた男が山道を帰っていると、突然美しい娘があらわれ、すぐそこに家があつてちようどうどんを打つたところだから寄つて行かないかと誘われた。娘のかわいらしさに、ついていきおいしいうどんを腹いっぱい食べた。ところが、家に帰つたとたん気持ちが悪くなり吐いてしまった。するとうどんだと思つて食べたものはミミズだつたそう。
40	おはちのふち	青梅	むかしはご飯を炊くと、おはちという桶に移し替へたのだが、しゃもじについた米粒を落とそうとおは

			ちのふちをたたくと、キツネが寄ってきて憑くからやるなと怒られたそうだ。
41	横尾子川のオオサキ	青梅 (沢井・横尾子)	ある秋の夕暮れ、沢井の原というところのイシというおばあさんが、水汲みに沢へ降りて行くと、5、6匹のオオサキギツネの親子が水浴びをしていた。沢の水は、飲み水・炊事・洗濯にも使ったのでいつもきれいに掃除して清潔にしていた。水飲み場を汚された怒りでおばあさんは思わず、キツネに石を投げつけた。石は一匹の子ギツネにあたり、死んでしまった。その夜、寝ようとするところどこかで悲しそうな泣き声がある。沢の方かららしく、おばあさんは、母ギツネが悲しんで泣いているんだ、すまない事をしたと思い、次の朝、そのままにしておいた子ギツネをそばの木にうめて油揚げをそなえて吊ってやった。
42	ほうろくをかぶった兄弟	青梅 (今井)	雨が降ると魚がよく釣れるということを知っていた今井に住む兄弟は、雨の日は釣りにいってはいけないと言われていたが川へ釣りに行った。魚は面白いほどかかって、びくがいっぱいになった。兄弟が暗くなり始めた畑道を歩いていると、兄は弟に呼ばれた気がして振り返ったが、弟は呼んでないという。すると今度は弟が兄に呼ばれたと兄を見るが、兄は呼んでないという。じっと見合っているうちに、同時にお互いがキツネに憑かれたと叫び、持っていたものを放り出して駆けだした。ちょうど2人を探しに来た父親は大声で2人に声をかけたが、聞こえない。悪いキツネに憑かれたらしいと思った父親は、家からほうろく ^(注22) を持ってきて兄弟にかぶせた。すると、走り回っていた兄弟は座り込んでしまった。父親が言う事を聞かずに夕方釣りにいっからだ、もういっちゃんいけないという兄弟はうなずき、頭にほうろくをのせたまま、おとなしく帰ったそうだ。
43	河辺の嘉七	青梅	むかし、河辺に嘉七という男が女房と2人で住んでいた。嘉七は大変器用な男で、鍛冶屋もすれば釣りもうまく、とくにキツネやムジナ捕りの名人だった。嘉七の捕り方は、鉄砲ではなく、スルメに火薬を詰

			<p>めたスルメ爆弾をキツネの穴のまわりにまいておき、食べさせ、口の中で爆発させるというむごいものだった。キツネもムジナも、根絶やしになりそうだった。ある年の寒い夜、嘉七が酒を飲んでいると、裏口から、長岡山のキツネ一家だがこのままだと一族が全滅してしまうのでスルメ爆弾だけはやめてくれという声が出た。あまりに声が悲しそうだったので、さすがの嘉七も胸が痛み、思わずスルメ爆弾だけはやめてやると約束してしまった。しかし、日が立つとまたキツネがとりたくなかった。嘉七は、スルメでなければいいと、油揚げを使うことを思いついた。ある日、油揚げに火薬をつめておいておいた。それを見つけた食いしん坊の女房が、嘉七がいなりずしを独り占めしようとしたと思い、火薬入りの油揚げを食べてしまった。女房のあごはあっという間に砕け、ものが言えなくなってしまった。</p>
44	権左淵のカッパ	青梅	<p>むかし、多摩川に権左淵という大きな淵があった。淵にはたくさんの魚がいて、村の漁師の大切な魚場でもあった。ところが不思議なことに、いつからかぷつぷつと魚が捕れなくなってしまった。ある秋の夕暮れ、三田の殿様の馬丁^(注23)が淵で馬を洗って帰った。その夜、いつもは夜なかにかいば桶^(注24)をガタガタ言わせる馬が静かなので変に思ったが、そのまま寝てしまった。早朝、馬丁が厩にいとってみると、かいば桶が隅の方にひっくり返っていたので持ち上げてみると、中に赤ん坊ほどの大きさの蛙の化け物みたいな生き物がうずくまっていた。鞭をふりあげ何者か問うと、それは拝島の竜ガ淵に住んでいる河童だという。拝島の河童がなぜここにいるのかわけを問うと、青梅の権左淵の魚がうまいと聞いて食べに来ていたのだが、うとうととしてきて、ちょうどいいところに網のようなものが下がってきたから捕まって寝て、気が付いたら厩だったということだ。そこへ殿様の剣術道場の先生がやってきたのでわけを話すと、河童に二度とここへ来ないと約束をさせることになった。しかし、河童の口約束では信頼でき</p>

			ぬと、証文 ^(注25) を書くことになり、河童は書いたが、文字とは言いにくい字で、先生にはなにが書いてあるのか全く読めず、河童に向かって怒鳴った。そのやりとりを見ていた馬丁が自分に見せてくれというので見せると、なんと字を知らない馬丁には読めたのである。そこで先生は証文を馬丁につかわし、河童は拝島へ帰り、証文は馬丁の家代々の家宝になったということだ。
45	穂なしカヤと名馬イケヅキ	青梅 (上沢井・中風呂) 源平のころ	上沢井の畑の中に池があった。ある日、一頭の馬が池のふちで遊んでいたが、とつぜん一声大きくいなくなると、池の中に生えていた一株のカヤを噛み切って走り出した。馬は、中風呂の大岩に一気に飛び降り、岩にひずめの跡を残しすごい速さで駆けていく。村人は大騒ぎで追いかけたが、馬は川に飛び込み、向こう岸にわたっても駆けていく。馬を捕まえろという伝言も、すごい速さで伝わった。川下の村人たちも色めき立ち、絹糸をくっていた村人が絹糸で捕まえることを思いつき、馬の駆けてくる街道に絹糸を張り、馬が通るのを待ち、馬が通り抜けようとしたところをやっと捕まえた。この馬の話は鎌倉まで伝わり、頼朝へ差し出すことになった。この馬が、宇治川の先陣争いで有名な名馬イケヅキであったといわれる。イケヅキが噛み切ったカヤは、その後穂が出ず、今も残る池の中に穂なしカヤとして存在している。ひづめの跡が残った大岩は、駒の石とよばれ、一部が残っている。絹糸を張って捕まえたところは駒絹と呼ばれ、その後駒木野になったといわれている。
46	腹立ち地蔵	青梅 (柚木)	柚木三丁目の忠堂院の庭に、桜の木がありその下に50センチほどの子育て地蔵が立っているが、腹立ち地蔵とも呼ばれている。ある春の日地蔵様の横の桜が咲いたので、花見をすることになったのだが、ムシロ ^(注26) を敷くのにお地蔵さまが邪魔になったので、ある男衆が少しの間どいてもらおうと池のそばに移動させ、花見をした。その夜、その男衆がふとんに入ると、苦しそうにうなりだした。おかみ

			さんが額に手を当てるとすごい熱で、男衆は一晩中苦しむうわごとを言い続けた。次の日、困ったおかみさんが隣の人に話すと、それはお地蔵様を動かしたから腹を立てたに違いないと、村人は地蔵をもとの桜の位置に戻し、みんなで手を合わせて詫びた。すると、男衆の熱はけろりとさがってしまった。
47	かぎの手地蔵	青梅 (二俣尾)	二俣尾の中宿にかぎの手地蔵と呼ばれるお地蔵様がある。ある日、成木の方から用事で来た男がここを通りかかったが、銭を持ってくるのを忘れたことに気づいた。しかし、いまから取りに戻ったら日暮れまでに帰れないと、困ってしまった。ふとみると、地蔵の前にお賽銭が、ちょうど買い物するだけあったので、後でちゃんと返しに来るから貸してくれと借りて、買い物を済ませ、家に帰った。何日かして男は借りた銭とお供え物をもって地蔵のもとへきて、お地蔵様のお賽銭で薬を買ったからか女房の病気がすっかりよくなった、ありがとうと感謝した。この地蔵は、道行く人の安全を守っているといわれている。
48	あごかけ岩	青梅 (日の出)	日の出山の山頂から少し下ったところに人の顔を掘った50センチほどの岩がある。あごかけ岩とよばれ、あごの部分欠けている。むかし、日本武尊が関東へきたとき、御岳山へ行く途中ここを通りかかり、岩にあごを掛けて一休みしたそうだ。
49	赤岩	青梅 (沢井)	沢井三丁目青梅街道のわきに小さな地蔵が祀られている。むかしそこは仕置き場で、軽い罪人はここでお仕置きされて放免となったが、重罪人は河原で首を斬られた。ある飢饉の年、沢井に寝たきりの病人をかかえる百姓がいて、看病しながら一生懸命働いたが収穫は少なかった。それでも役人は年貢を納めろと言ひ、業を煮やした役人は百姓をとらえ、見せしめのために打ち首にしようとした。みんな反対したが、聞き入れられず、百姓は河原に引き出され、打ち首になった。その後、岩にかかった百姓の血はいくら洗っても落ちず、赤岩といわれるようになった。

50	忠右衛門の岩	江戸時代	江戸時代中ごろ、沢井に中風呂忠右衛門という人が住んでいて、あるとき彼を頼って修斎という医者がやってきた。忠右衛門は修斎を2つの岩の近くで開業させてやると、評判もよく、繁盛した。修斎には1人の男の子がいて、大柄な頭のいい子で後を継がせようと思っていたが、15、6歳になったとき、どういうわけか出家すると言いだした。2人は止めたがきかず、家を出てしまった。何年かたったがその子から何の頼りもなく、帰っても来なかった。失意のまま修斎は亡くなり、医者の家は潰れてしまった。忠右衛門も亡くなり、さらに何年かたったある夕暮れ、忠右衛門も息子が2つの岩を通りかかったときだった。岩の上から血に染まった衣を着た亡霊が、修斎の家のあったところをじっと眺めていて、あるときは見上げるような大きな坊さんが、2つ岩のまわりを歩いていたので、出家したという修斎の息子が災難にあって死んで、家に帰りたくて亡霊になってきたのかもしれないと、霊をねんごろに弔ってやった。いつからかこの岩は忠右衛門の岩と呼ばれるようになったそうだ。
51	力石	青梅 (二俣尾)	むかし、村の若者たちはよく力比べをした。二俣尾の武田金市さん宅の庭に、高さ80センチ、幅30センチほどのだ円形の石がある。中央に「力石五拾六貫余 ^(注27) 」、右に「寛政十二年 ^(注28) 庚申四月、二俣尾」、左に「田中亀松 十九歳」と彫りつけてある。この石はもともとは梅郷の井上さん宅にあったものだ。土地の若者たちは、この石を持ち上げては力比べをしたのだろう。亀松は、この石を下駄履きのまま担ぎあげ、多摩川を渡り、一度も休まずに二俣尾まで担いできたと言われる。
52	蛇石、おうむ石	青梅	蛇石は、吹上峠の頂上にあり、高さ1.5メートルくらいのとがった山型の石である。この石はチャート ^(注) という固い石で、真夏でもしっとりと濡れていて冷たい。石の間に穴があり、春から夏にかけて何十匹という蛇がこの石に集まっていることがあるという。夏の暑さに涼みに来るのかもしれない。

			おうむ石は、御岳山と奥の院の間にある大岩である。この岩に向かって大声でなにかいうとそっくり声が返ってくるので、おうむ石とよばれている。
53	二ッ塚	青梅	旧二ッ塚峠の頂に、小さな2つの塚がある。桜の木の根元にあって今も花や水が供えられている。むかし、この山のふもとに母と幼い娘が住んでいた。母親は病気だったが悪くなる一方で、自分の死が近いことを悟った。ある日、見舞いに来てくれた近所の人に、もうすぐ死ぬというのに自分はまだ誰の役にも立っていないので、峠の頂に息のあるうちに埋めてくれと頼んだ。近所の人びつくりして止めたが、自分を埋めてくれれば死んでから必ず峠を守るからときかなかった。すると、それを聞いていた幼い娘が、母ちゃんが行くならわたしもいっしょにと泣きだし、仕方なく村人たちは大きなかごに親子を入れて埋めてやることにした。村人たちは、かごを峠の頂に埋めて、2つの塚をつくって弔ってやったという。桜の幹には、「古の峠の道は変われども 塚になりてぞ今に残れる」という木札がさがっていた。
54	イチコの墓	青梅 1340年頃	約650年前、楠正成が湊川の戦で戦死したころ、青渭神社 ^(注29) に仕えるイチコという美しい巫女がいた。イチコは、気立ても良く誰からも慕われ、氏子の若い衆は大勢イチコに想いを寄せた。イチコが祭壇の前に現れるとそこだけ明るくなるようだった。ところが、イチコは誰にも心動かされず、そのうちふとした病がもとで亡くなってしまった。氏子たちは、イチコは惣岳様の化身だったに違いないと、惣岳山頂に手厚く葬った。不思議なことに、その後この神社に仕える巫女は、みな美しく、イチコと同じように若くして死んでいった。巫女たちの墓には松が植えられ、板碑 ^(忠30) まで建てられ、氏子たちの巫女に寄せる想いの深さがしのばれる。板碑は3基あり、建武 ^(注31) の年号が刻まれている。
55	首洗い井戸	青梅	J R 青梅線の宮の平駅から東に500メートルほどいったところに小さな井戸がある。むかしはうっそうとした林のなかだったはずだが、現在は住宅と住

			宅の間にあった。この井戸は、「首洗い井戸」と呼ばれ、まわりを玉石で囲み、縦125センチ、横85センチほどの長方形である。首洗い井戸は、戦いのときに打ち取った敵の首を洗った井戸ではないかと言われている。
--	--	--	--

第2節 民話の類型化

表1の民話の類型化を試みた。様々な類型化が可能だが、本稿では民話を、①物語中で起こった問題・課題、②問題や課題の解決の形、③解決にあたっての納得の仕方、④物語の持つ聞き手へのメッセージの4つの視点から類型化を行った。民話は土地ごとに異なる課題解決の伝承と言ってもよいと思われる。そのような視点から見ると、今回収集したすべての民話は何らかの形で4つの視点から解釈することが可能となる。そこで、4視点から収集した民話の解釈を試みた。それをまとめたのが表2である。

表2 4つの視点から解釈した民話一覧

No.	タイトル	課題	解決	納得	メッセージ	場所
1	光仙婆さん	百日咳	祠にあげたお茶飲ませると治った	光仙婆さんが百日咳の神様だから	風邪のときにはお茶がいい？	稲城 (坂浜の 小田良)
2	コン友さん					稲城
3	孝子長五郎	貧しい自分の田畑ない	幕府から褒美もらい新田開墾	働き者の親孝行息子だったから	親の言うこと聞きなさい 周りの人は見ている 幕府の新田開発の政策があった	稲城 (押立村)
4	観音さまになった馬	ばくち好き直らない	ばくちやめて死んだ馬頭観音にお祈り	馬頭観音のおかげだ	ばくちばかりしていると大事なものが失う	稲城
5	河童	小僧さんの家の入口の邪魔なもの	馬の鞍を村一番の泳ぎの名人がと	魔性のものは黄金に触れない	人助けは自分に返ってくる	稲城 (長沼村)

		小僧の正体	る 小僧=河童	毎日届けられた魚はお礼	魔よけには金	
6	丸石稲荷	石が耕作の邪魔 石どけるとなく	丸石稲荷大明神として まつたら鳴かなくなる	なにか(狐?)のたたりだったんだね	不思議なことは狐のせい?	稲城 (坂浜の 小田良)
7	お福ヶ谷戸	子供殺した狼への復讐	親狼の前で狼の子供なぶり殺しにした	狼に怒り・悲しみが通じたから襲ってこなかった	お福ヶ谷戸の由来の伝来	稲城 (矢野口 東長沼の境)
8	舌をぬかれたお獅子	池の水がなくなる	獅子の舌抜く	獅子が水盗るほど水不足だった	池は大切な水源	稲城 (大丸)
9	清水窪の小豆婆さん	雨の日に小豆婆さんがでてる	渡るときに鼻歌で恐怖を紛らす	水音が小豆とぐ音に聞こえた	雨の日は川に近づくな	稲城 (平尾/ 清水窪)
10	婆塚橋	女六部が流された 悪疫の流行	橋の傍らに塚と2本の松 婆さんの供養 川上神社崇める	婆塚橋の婆さんのせいだった		稲城 (坂浜)
11	雁追橋	橋の名前の由来は何?	男たちが追い返された	まるで多摩川に集まる雁のようだ	昔と今の環境の違い 故郷を大切に	稲城 (東長沼)
12	道陸神	・道陸神が盗まれた ・直吉が行方	・お地藏様の足元に道陸神	道陸神盗んだ直吉に罰がくだった	神仏へ信心しなさい 反道徳的な	稲城 (平尾・金)

		不明	・神仏にお祈り		ことはしてはいけない？ 暗黙のルールがあることを学ぶ	程)
13	ムジナ小僧	泊めてあげた小僧さんが風呂からでてこない	風呂場には一匹のムジナ	小僧さんはムジナだった	修広寺への不満？疑心？	稲城（平尾）
14	神がかりの童子と天神さま	多摩川の洪水をどう防ぐか	天満天神をまつる	子供に神が降りて助言した	困ったら神様が助けてくれる 天満天人のはじまり	稲城（矢野口村）
15	高勝寺の観音さま（坂浜の一番鶏）	本尊である観音さまが雨漏りで濡れる	塗り師にだす 欲深な塗り師の家が火事	鶏をはやく鳴かせたのも火事を起こしたのも観音さまだ より信仰するに値する神様だ	妙福寺・高勝寺の宣伝 不信心なこと（悪事）をすると天罰がくだる 神様は大事に	稲城（坂浜）
16	狐のいたずら	狐のいたずらがすぎて困る	地主が狐に忠告 しばらくいたずらしなくなる	なくなりもなのは狐のせい 狐と交渉可能	狐がいたんだよ いたずらすると追い出されるからするな	稲城（平尾）
17	馬とドロボウ	泥棒が入る	馬が話しかける 泥棒怖くて逃げる	馬を飼っている家には泥棒は入らない	農家で馬を飼おう 馬がいることのメリット	稲城
18	鳩に化けた天狗さま	一匹の鳩を撃ち落とす	家に逃げ帰る	鳩は天狗だった	天狗は山の神様	稲城

				山の神の日 だから天狗 が現れた	自然信仰 山の神の日 は狩りして はいけない	
19	青龍にのっ てあらわれ た妙見さま	疫病をどう 防ぐか	言い伝えに のっとして 龍を作り担 いでお祈り 疫病はやら ない	妙見さまが 守ってくれ た 「蛇より行 事」は無病息 災を祈る行 事だ		稲城 (百 村)
20	渡し場の力 石	お坊さんを 怒らせた	村役人総出 で謝って許 してもらい、 石を返して もらう	お坊さんは 神に仕える 人だから嘘 が嫌い	約束は守る もの 法泉寺の宣 伝	稲城 (矢野 口村)
21	狐火	狐の生態	ムジナの巢 横取り 「コンコン」 ではなく「キ ャンキャン」 交尾期に狐 火 狐火の謎は 解けない 明治中ごろ まで狐火見 られた	狐はずる賢 い 狐火は狐の 交尾期に見 られるので 狐が見せて いるのだろ う		稲城
22	首なし地蔵	ばくちに勝 つ	お地蔵さん の一部を持 つという必 勝法 みんながお 地蔵さまを 欠くのでお 地蔵さまが	お地蔵さま のご利益	お地蔵さま を大切に	稲城

			ぼろぼろ			
23	台の藪の檜	檜が唸る	みみずくが 檜の穴のな かで鳴いて いた 十数年後、 3本のうち の一本の檜 が、杉山神社 の改築に使 われる	みみずくの 声が大き な空洞で響 いていた	昔あった自 然の一部が 神社として 残ってる？	稲城 (平尾 台)
24	大丸村の夜 泣き石	持ち帰った 石が泣く	もとのとこ ろに返しに 行く	夫婦石だっ たのに引き 離された悲 しみ	夫婦を離し てはいけな い？ 夫婦は離れ ないほうが いい？	稲城 (大丸 村)
25	子供にとり ついた狐	子供の熱 病・奇行	お犬様呼ん でお祓い 元気に成長 80歳以上 生きる	狐の霊がつ いていて追 い払ったか ら元気にな った	自然信仰 御嶽神社の 宣伝	稲城 (坂浜 村)
26	天狗の腰か け杉	杉の木の枝 が曲がって しまう	そのままに しておく 推定樹齢3 50年	山の見回り している天 狗の休憩所 だった	自然信仰 自然のもの は自然のま まにしてお くのがよい 天狗は山の 神	青梅
27	天狗笑い	杉切りして いると天狗 がでてきて 笑う	御師が拝む それでもや まない	拜んでもで てきてしま うのでどう しようもな い	自然信仰 山の杉を切 るな 自然(山)を 大事に	青梅

28	天狗の夜まね	夜、御嶽神社の山のほうからドウヅキ唄が聞こえる		天狗が夜まねをしている		青梅
29	天狗のうでい	うでいを切ってしまった	けがをする	天狗のうでいを切ったから		青梅
30	のぞき岩の天狗	のぞき岩で大男を見る	百歳近くまで丈夫で長生きした	天狗を見たおかげ	(山の神に) 長寿を祈願? 願い 自然信仰	青梅
31	川天狗	魚とり	とった魚全部いなくなる	たくさんとりすぎたから天狗が怒った	自然信仰 川の魚とりすぎたらいけない 魚は自然(山)のもの 必要以上は自然荒さない	青梅
32	送り狼	狼が襲おうとついてくる	タバコで近づけさせない	狼はタバコが嫌い	狼煙? 身の守り方 御嶽山には狼	青梅
33	狼の骨	狼の骨の使い方	御祈祷 病気の治療(薬) キツネツキのお祓い	狼は神聖なものだった?	自然信仰? 御嶽山のお犬様 狼は心の拠り所の一つ (信じていたもの)	青梅
34	二間の岩の狼	りんのうえの狼	狼をいじめないよう肝に命じる	狼に石投げたからたたられた	狼は神聖なものだからいじめたり	青梅

					してはいけない？	
35	御岳山のお犬様	山鬼に通り道ふさがれる	白狼が道案内してくれる 白狼に御岳山を守護するよう命じる	白狼は神の助け 神が日本武尊を助けた 白狼がお犬様の正体	御岳山の守護神お犬様の宣伝	青梅
36	猪とらさん	狩りの獲物を狼にした 狼を怒らせた 山鳴り	御師と一緒に狼を弔い 祈禱して山鳴りおさめる	山の神である狼を撃つ たからだ	山の神である狼に手を出してはいけない 自然信仰	青梅
37	狐火	トミ売りのおじいさんがくる	トミを買った家に狐火 家は景気悪くなる トミはキツネのことだ	キツネに騙された キツネツキの子が言う からキツネなのだろう キツネに憑かれたから 仕方ない？	商人に騙されることもあった？	青梅
38	かんざし盗人	嫁入り行列の途中でかんざし・こうがいがないくなる	道の傍らにかんざしと こうがいがおいてある	キツネがよくるので キツネのいたずら		青梅
39	ミミズのうどん	山のなかで美しい娘に うどん食べていけと誘われる	家で吐いたらミミズが でてきた		おいしいうどんが食べたいという お上への抗議？	青梅
40	おはちのふち	しゃもじについた飯粒 落とす	怒られる？	キツネがよくてきて憑かれるから	行儀が悪いことをする な？	青梅

41	横尾子のオオサキ	・キツネが水飲み場汚す ・母キツネの悲しそうな声 ・罪悪感の払拭	キツネへ石投げつける 殺した子キツネを弔う	子キツネが死んで悲しんでいる 悪いことをした	キツネにも感情がある ちゃんと弔うことが大切 命を大事に？	青梅 (横尾子)
42	ほうろくをかぶった兄弟	キツネにつかれた兄弟を正気に戻す	ほうろくをかぶせる	言うこと聞かないからキツネに憑かれた	言うことをちゃんと聞きなさい	青梅 (今井)
43	河辺の嘉七	キツネとの約束を破らずにキツネをどうするか	スルメではなく油揚げを使う	悪知恵を働かせたから罰があたった	約束は大切にしよう キツネの毛皮の価値	青梅 (河辺)
44	権左淵の河童	河童に二度と権左淵へ来ないと約束させ証明させる 証文が読めない	河童に証文を書かせる 字が読めない馬丁が証人		川の魚は大切だった 川にも所有権みたいなものがあつた？	青梅 (権左淵)
45	穂なしカヤと名馬イケヅキ	馬捕まえる	絹を道に張って捕まえた	絹は強い 名馬たる由縁	絹の素晴らしさ	青梅 (上沢井・駒木野)
46	腹立ち地藏	男衆の熱	お地藏様を元の場所に返し謝る	お地藏様を大切にしないから	お地藏様大切に	青梅 (柚木)
47	かぎの手地藏	銭忘れて薬買えない	お地藏様のお賽銭を借りる	お地藏さまが助けてくれた	お地藏様大切に	青梅 (二俣尾)
48	あごかけ岩	休む	岩にあご掛	あご掛ける	日本武尊が	青梅

			ける	あご欠ける	いた	(日の出)
49	赤岩	見せしめに打ち首にされる	抵抗できず打ち首	不条理だ 無念だ	不条理な政治への不満	青梅 (沢井)
50	忠右衛門の岩	岩の近くの亡霊	忠右衛門の息子が修斎の息子と思われる亡霊を弔う	忠右衛門の偉業だから忠右衛門の岩とよぶ	縁を大事に	青梅 (沢井)
51	力石	力比べ	田中亀松が運んできた	すごく力もちだった	当時は力があることが有利で優れていることだった	青梅 (二俣尾・梅郷)
52	蛇石、おうむ石			暑いから涼みにくる おうむのように声を返す		青梅
53	ニッ塚	病気で死にそうな母と娘が生き埋めにしてくれと頼む	村人たちはかごに入れて埋めて、塚をつくって弔う	もうすぐ死ぬかもしれないし願いを聞き入れてやる	死んだ後も自分の意思がある	青梅
54	イチコの墓	イチコをはじめ、巫女たちはイチコと同じような人生を歩む	巫女たちの墓をしっかりとつくる	巫女たちは惣岳様の化身	神様と人は違う	青梅
55	首洗い井戸			楯の館が近かったから打ち取った首を洗っていたのでは	当時の懐古	青梅

第3節 考察

以上の分類から、収集した民話において、3点の注目すべき生活意識の特質が抽出された。第1は生活圏と神・動物の関係、第2は課題の質と環境の関係、第3は生活環境と死の概念の関係である。

第1項 生活圏と神・動物の関係

生活圏により、民話にでてくる神・動物の役割やそれらに対する人々の対応に違いがみられた。稲城周辺での生活圏は、①村・里のような身近に生活している空間、②山のような滅多に行かない遠距離空間、③①と②の中間地帯のようなたまに行き来して見知っている空間の3つから構成されている。一方青梅では、①が②に内包されていて、③の中間地帯はない。また、②の山は遠方ではなくむしろ生活の場そのものである。

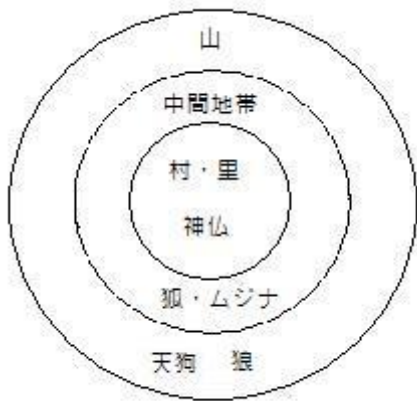


図1 平地型生活圏

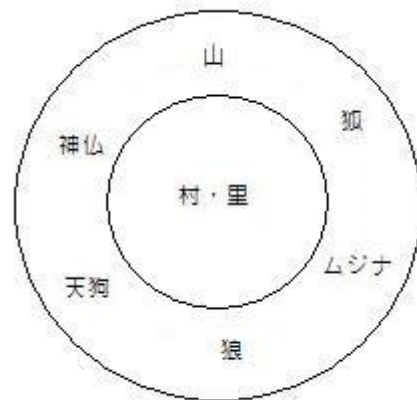


図2 山地型生活圏

この生活圏の構造の違いが原因で、神として崇めているものに違いがでたり、動物や神に対する意識に差ができる。

たとえば、No. 4の稲城の民話では、家で飼っていた農馬という身近な動物を神様として崇めているが、青梅ではNo. 26やNo. 36の民話からわかるように、天狗や狼を山の神として崇めている。これは、それぞれにとって身近なものが、農馬と天狗・狼、つまり山そのものというように違うからで、それは農業と林業という職の違いが関係している。

また稲城では、No. 12の民話のように祈る対象を「神仏」とひとくくりになっているが、青梅の民話では「神仏」という言葉が出てこない。これは、稲城には身近な動物や亡くなった人、狐やムジナ、遠くの山と、信仰の対象がたくさんあるのに対し、青梅ではほとんどの場合、御岳山・御嶽神社・狼・天狗など、山に対する信仰が中心としてあるためである。

狼についていえば、稲城ではNo. 7とNo. 25の民話から、御嶽神社のお犬様には信仰があ

っても、狼自体に対する信仰がないことが分かるが、青梅の場合、No. 34、No. 36のように、狼自体を山の神として信仰していることがわかる。

このように、人々と信仰対象の距離と職が信仰心と関係していることが分かる。この距離の認識と職による差は、生活圏による生活範囲の認識から形成されると考察する。

第2項 課題の質と環境の関係

生活環境、つまり山地と平地で課題の質に違いが見られた。そこで、山人型と里人型と定めて、それぞれの課題に見られた特徴を上げる。

・山人型

生活していく上での課題よりも、山での課題、特殊時の課題、神関係の課題が多く見られた。

山での課題とは、No. 32における狼、No. 39における得体のしれない娘など、山での自身への脅威に対し、どうするかという課題である。

特殊時の課題とは、No. 37の嫁入行列時の狐のいたずら、No. 38の得体のしれないトミ売りのお爺さんへの対応など、通常時とは違う状況での課題である。

神関係の課題とは、No. 27で山の神である天狗が仕事の邪魔をしたり、No. 31のように天狗を見たなど、神が何かをしているのを直接見たり聞いたりしたことに対する課題である。

・里人型

生活での課題、不思議なことに対する課題が多くみられ、神関係の課題はほとんどなかった。

生活での課題とは、No. 1の百日咳にかかった時どうするか、No. 14の洪水がなんとかならないか、No. 19の疫病を防ぐにはどうするかなど、生活していく上で困ったことをどう解消するかという課題である。

不思議なことに対する課題とは、No. 6の石が鳴くという怪異にたいしてどうするか、No. 8の池の水が朝になると消えることに対してどうするか、No. 25の子供の熱病や奇行に対してどうするかなど、説明がしにくいことへの課題である。

以上のように、山人型と里人型で違いが見られた。このことから、山人と里人では、村や里に対する認識が違うのではないかと推測する。里人型の民話では、生活の課題に顕著なように、村全体としての脅威に対する課題があげられたが、山人型の民話からは、村や里単位での課題はほとんど見られなかった。

第3項 生活環境と死の概念の関係

1項、2項とも関連するが、山人型・里人型で死に対する考え方が違うのではないかと推測する。

里人型では、No. 1の尼僧から神への変化、No. 4の馬から神への変化、No. 10の死んだ女

六部のたたりなど、人や動物が死んだ後も現世との関わりを持ち、なんらかの形で自分たちと繋がっていると考えていると推測される。

それに対し山人型は、No. 41での親狼への同情、No. 50での無念で出てきた霊への弔い、No. 54の惣岳神社の巫女の死に対する考えなどを見ると、現世に残った者に対しての同情や、現世に生きていた頃のままの霊に対する思いや同情、共通した死に対しても個々の死への尊重が見られ、現世が中心に考えられているのではないかと推測する。

つまり、里人型と山人型では図3、図4のように、時間の概念、つまりあの世とこの世のとらえ方が違うと考察する。

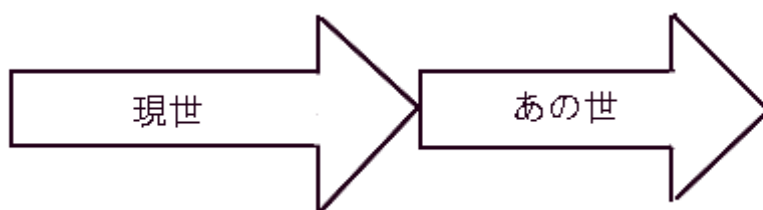


図3 里人型の連続的・輪廻的考え



図4 山人型の現世的考え

これらの意識の差は、職の差からきているものと考察する。里人型の連続的・輪廻的考え方には、稲作や畑作の影響があると考えられる。種を植え、育て、収穫し、種をとり、また種を植え、育てる。この繰り返しの意識が、生死の概念にも影響している。対して山人型は、林業など、繰り返しといっても木のサイクルはとても長く、1年や2年では成り立たない。このことから生きている間のことは死んでも残るし、現世に対する未練などで現世に出てくることはあっても、それらは生きていたころの彼らそのものであるという意識が強く、自分たちになにかをもたらず存在であるという認識はないように思われる。たとえば、No. 54の民話の内容を里人的に考えると、イチコの後の巫女がイチコに似た生き方をするのなら、イチコの生まれ変わりだと捉えてもおかしくはない。しかし山人型の考え方では、神様の化身として、イチコもその他の巫女もそれぞれを区別して、神の化身だから似たような生き方になるけれど、それぞれは違う人間なのだという意識があるように思える。

このように、生活環境が違うことから生死の意識にも違いが見られると考察する。

第4節 まとめ

第3節で出した結論から、里人・山人型による違いを整理したものが表3である。

表3 里人型と山人型の差

生活意識	里人型	山人型
① 活圏と神・動物の関係	信仰対象が多様	山が信仰対象
②課題の質と環境の関係	生活の課題が多い	直接的な神に対する課題
③生活環境と死の概念の関係	連続的・輪廻的考え	現世中心的考え
採話地域	稲城市	青梅市

この差は、共通して生活環境の違いによって生まれると考察する。また、そこから生活範囲の認識も違っている。里人型では、村・里を中心に外の世界があるという構造が成り立っているが、山人型の場合、里・村という認識は強くなく、山と個人を直接感じ、山より外の世界はあまり関心がなく、ある意味で閉鎖的である。

その世界観の違いから、上記のような意識につながっていると考察する。

そして、この差は昭和ごろまでは成り立っていたが、今現在、多摩圏での山と都市ではこのような差はないと推測される。近代化により交通が便利になったこと、地域による職の差がなくなったこと、新住民の存在による村意識が低下したことなどが原因としてあげられる。

注釈

- (1) 引縄のついた捕縛用の網らしいが、筆者が調査した限りではムツウ網という名前の網は確認できなかった。
- (2) 今の台原交差点から少し南の方。
- (3) 修行の尼僧。
- (4) 江戸幕府の中の女中。
- (5) 道陸神をよその村から盗むという冒険めいた風習があった。
- (6) アナグマ・タヌキ・ハクビシンのこと。
- (7) 神が人に移ること、その状態。
- (8) 「こしだま」と読む。腰の位置で鉄砲を撃つこと。
- (9) 寛文2年(1662年)
- (10) 建物を支える石。
- (11) 坂浜村にあった家の屋号。屋号とは、一家・一門の特徴をもとに家につけられる称号のこと。
- (12) 「お手がそろえば文句にかかる よいこのさんさ

めでめでたの若松さまよ お手がそろえば文句にかかる よいこのさんさ
枝も栄えて、そりゃ葉もしげる お手がそろえば文句にかかる よいこのさんさ
こぼれ松葉を、あれ見やしゃんせ お手がそろえば文句にかかる よいこのさんさ
枯れて落ちても、そりゃ夫婦づれ お手がそろえば文句にかかる よいこのさんさ
よいのよいの エンヤラネー」

- (13) 天狗がとまったという伝承がある木。
- (14) とった魚をいれておく器
- (15) 市有形民俗文化財に指定されている。
- (16) 山伏や祈祷師の異称
- (17) 狐の霊に憑かれたという人の精神の錯乱した状態、そのような精神状態にある人。
- (18) 伐り倒した木を山の斜面に横に積み重ねておいたもの。
- (19) 約100メートル
- (20) 昔は嫁入りは行列をつくって歩いた。
- (21) 髪を掻きあげて髪を整えるための道具。
- (22) 素焼きの土鍋の一種。
- (23) 馬の世話や口取りをする人。
- (24) 馬や牛などに与えるえさをいれておくもの。
- (25) 証拠となる文書。
- (26) 藁やイグサなどの草であんだ簡素な敷物。
- (27) 五拾六貫は210キロ。
- (28) 1800年
- (29) 「あおい」と読む。一時は惣岳大明神（そうがくだいみょうじん）と呼ばれていた。
- (30) 主に供養塔として使われる石碑の一種。
- (31) 1334～1336年

参考文献

- 1) 稲城市教育委員会社会教育課 『稲城の昔ばなし』（1992年）
- 2) E.M. ロジャーズ 『イノベーション普及学』 産能大学出版部（1990年）
- 3) 青梅市教育委員会 『青梅のむかし話』（1994年）
- 4) 奥多摩町教育委員会 『奥多摩町誌資料集五 奥多摩町の民俗一語彙・遊びとわらべうた・民話一』（1982年）
- 5) 菊池正 『とんとん昔話』 東京新聞出版局（1998年）
- 6) 新多摩川誌編集委員会 『新多摩川誌 本編[中]』 財団法人河川環境管理財団（2001年）
- 7) 多摩市史編集委員会編 『多摩市史叢書（5）多摩市の民俗（口承文芸）』 多摩市（1992年）

- 8) たましん地域文化財団『多摩のあゆみ』
- 9) 多摩百年史研究会編『多摩百年のあゆみ』 東京市町村自治調査会 (1993年)
- 10) 鳥越皓之『柳田民俗学のフィロソフィー』 東京大学出版会 (2002年)
- 11) 日本児童文学者協力会編『東京都の民話』 偕成社 (1980年)
- 12) 原田重久『武蔵野の民話と伝説』 有峰書店新社 (1989年)
- 13) 日野市史編さん委員会『日野市史別巻 市史余話』 (1990年)
- 14) 福田アジオ『柳田国男の民俗学』 吉田弘文館 (2007年)
- 15) 町田市文化財保護審議会編『町田の民話と伝承 第一集』 町田市教育委員会 (1997年)
- 16) 町田市文化財保護審議会編『町田の民話と伝承 第二集』 町田市教育委員会 (1998年)
- 17) 町田市文化財保護審議会『町田の伝承 町田の方言と俗信・俗謡』 町田市教育委員会 (2004年)
- 18) 水谷紀美子『続にしたまの創作民話』 西多摩民俗研究会 (1994年)
- 19) 宮本常一著・香月洋一郎編『【宮本常一著作集別集】私の日本地図10 武蔵野・青梅』 未来社 (2008年)
- 20) 柳田国男『日本の伝説』 新潮社 (1977年)

第3章 環境における市民農園の可能性

経営情報学部 20911026 石川健太

はじめに

最近市民農園への人気が高まっている。1990年（平成2）の「市民農園整備促進法」に基づいた定義によると市民農園とは a) 目的が趣味の農作業である事 b) 農地の貸し借りである事 c) 小区画（一区画 1000 m²以下）である事 d) 相当の人数を条件に定型的な条件であるというものである。もう少し分かりやすく言い直すと、サラリーマン家庭や都市の住民がレクリエーションとしての自家用野菜・花の栽培、高齢者の生きがづくり、生徒・児童の体験学習などの多様な目的で、小面積の農地を利用して野菜や花を育てるための農園のことをいう。このような農園は、ヨーロッパ諸国では古くからあり、ドイツではクラインガルテン（小さな庭）と呼ばれているが、わが国では、市民農園と呼ばれるほか、レジャー農園、ふれあい農園などいろいろな愛称で呼ばれている。

市民農園の数は平成4年の691箇所から平成21年には3596箇所まで増えている。都市住民が手軽に自然や農作業に触れる事ができるためや、食料自給率の増加のため、都市の緑地や空き地や耕作放棄地の有効利用のためなど、人気の理由が様々挙げられる。市民農園は、これからの環境や生活を変えていく一つの機会となりうる物ではないだろうか。

そこで本稿では市民農園の歴史を調べると同時に、市民農園の新しい役割について考察し、これからの市民農園の可能性を提言する。

第1節では市民農園の歴史をドイツのクラインガルテンから振り返ると共に日本での発展の歴史を考察する。第2節では市民農園の新たな役割に対して考察していく。第3節では全体のまとめを論述していく。

第1節 日本における市民農園受容の歴史^{注1)}

第1項 ドイツのクラインガルテンの歴史

ドイツのクラインガルテンは歴史的には二つの系譜がある。一つは都市貧民に対する貧困対策、飢餓対策的な観点から建設された貧困者菜園の系譜である。19世紀初頭にはヘッセン伯の考えでキール近郊にドイツで最初の貧困者向け菜園が建設され、19世紀半ばにはドイツ各都市で貧困者菜園が建設されていた。ベルリンは19世紀後半からの急激な都市化、人口増の中で、大量の賃貸集合住宅が建設された都市であり、賃貸住宅住居の低所得層、労働者向けの貧困・飢餓対策、レクリエーション対策としてクラインガルテンが建設されてきた歴史を持っている。

二つ目の系譜は青少年の健全な育成といった、より教育的な目的のもとに整備された運

動・教育施設の系譜である。19 世紀半ばに活躍したライプチヒの整形外科医シュレーバーの名前にちなんで作られたシュレーバーガルテンが今のクラインガルテンにつながる。19 世紀半ばライプチヒでの産業化や都市化による劣悪な住宅環境の中で、青少年の心と健康に役立つ野外の運動施設を整備する必要があると主張したシュレーバーの考えをもとに、彼の死後 1864 年に設立されたシュレーバー協会がライプチヒ中心部近くの西部近郊の草地での子供のための運動場がライプチヒのクラインガルテンのさきがけである。その後、これが発展して家族のための小区画の園芸用地も備えた家族ガルテンが加わったライプチヒ独自のクラインガルテン施設が発展すると共に 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてドイツ各地に広がっていく事になった。シュレーバーガルテンそのものはシュレーバー本人の発案ではないが、彼の主張を受け継いだ人々の努力によって広がりクラインガルテンの別称となっていく事だ。今日のクラインガルテンが単に個々の分区菜園だけでなく共用の利用施設や子供の遊び場が存在する事の意義はこのシュレーバーガルテンの発想に見る事ができるだろう。

第 2 項 日本の市民農園の歴史

日本の歴史において、市民農園は利用者のレクリエーションや保健休養や農地としての利用など様々な機能や役割があるが、これらの機能は常に安定的に発揮されていた訳ではない。実際には各時代の社会的、制度的要因によって、市民農園はその形態や社会的役割を大きく変化させてきた。

大正時代の日本で急速な社会経済の発展に伴う都市人口の全国的増大によって、都市計画の必要性が強く認識されるようになった。「緑地」の概念や意義が確立、展開されていったのもこの時期であり、このような流れの中で市民農園は日本に紹介された。まず 1926 年（大正 15 年）に大阪市農会によって湯里農園、山口農園の二つが開設されている。さらに、1934 年（昭和 9 年）に開設された城北公園の一角に市民農園が設けられた。東京では 1933 年（昭和 8 年）に板橋区（現練馬区）に大泉市民農園が設けられ、1935 年（昭和 10 年）には渋谷区に羽沢区種芸園が開園した。日本の市民農園の設置目的は市民の保健休養や教育、都内の緑地確保といった所にあり、ドイツのクラインガルテンが日本の市民農園の開設に際して設計や運営等に大きな影響を与えたものと位置づける事ができる。各地の利用状況については大泉市民農園について当時の新聞や雑誌記事を見ると利用客が主に小学校であり、個人での利用者も羽沢区種芸園ではおよそ 100 人、大泉市民農園は 20 人程度であり、貧弱な利用状況であった。市民にも割合認知されていた市民農園もあったが、これ以降新たに市民農園が開設される事はなく、市民農園は日本に浸透せず、現在のように多くの市民が利用するにはいたらなかった。

日中戦争が勃発すると、農村の疲弊による食料不足が生じ、建設予定地や休耕地等の土地を利用した一般市民による耕作が増加し、大きな菜園運動を巻き起こしたとされている。このような食料自給を目的とした土地利用は、これまでに成立していた市民の保健休養や

教育、都市内の緑地確保といった目的を持つ市民農園とは異なるものである。しかし、戦後復興による食料自給の改善や利用地の減少等の影響を受けて、空閑地利用は急速に消滅していった。

1960年代半ばから遊休農地の有効活用を主目的とした市民農園が一部の先進的な農家によって開設されるようになった。これらは耕作放棄を回避する手段として始められたのであるが遊休農地の増加や緑地、空き地不足に頭を悩ましていた自治体が市民農園に目を付け、農地の処遇に困っていた農家と契約を結び、現在に多く見られるような行政が開設する市民農園が成立された。

1960年代から70年代においては、都市の急激な過密化や都市公害の発生等によって生活環境の保全や緑の保全が叫ばれ始めた時期であり、余暇の時間の拡大によるレクリエーション需要の増大と相まって市民農園は大きな人気を呼び農園設置数も増加していった。1980年（昭和50年）には都内で357カ所の市民農園が開設されている。

1989年（平成元年）に「特定農地貸付に関する農地法等の特例に関する法律」、翌1990年（平成2年）に「市民農園整備促進法」が制定され、市民農園に対し「健康的でゆとりのある国民生活の確保」「良好な都市環境の形成」「農村地域の振興」という新たな役割が設定され、生産緑地を活用した、充実した設備を持つ市民農園の整備が目指された。また、農村地域では都市住民を対象とした住宅型の市民農園が多く建設され地域づくりの新たな拠点として注目された。

現在市民農園は利用者の需要に供給が追いついていない状況にあり、市民農園の人気はますます増している。

第2節 新しい市民農園の役割

一般的に市民農園は事業主と利用者の関係内で土地の貸し借りなどのサービスが実施されている。しかし、最近この事業主と利用者の関係に「地域住民」が加わり、3者の相互関係を築く市民農園が出現してきた。地域住民が市民農園の運営に参加する事で、利用者との交流が増えたり、農作業のやり方を教える等のサービスを提供したり、その土地に関して利用者と会話するためにその土地について知るようになる。また、利用者と共に農作業をする事を通してその土地の自然について知るようになる。このように地域住民が市民農園に参加し、直接自然にふれあい、使用する事で彼らは自然環境の適正消費範囲を感覚的に感じるようになる。また、適正範囲内で自然を利用するという事は持続的な自然環境の保護につながる。

例えば今回取材を行った東京都奥多摩町にある「おくたま海沢ふれあい農園」も事業主、利用者、地域住民の三者の相互関係で運営している市民農園のうちの一つだ。おくたま海沢ふれあい農園は奥多摩町の地域活性化を目的としたグリーンツーリズムの一環として2007年（平成19）に設立された市民農園である。事業主である行政は主に施設の設立などハードを作る役割を担っており、地域住民らは運営やコンテンツ作り等のソフト面での役

割を担っている。おくたま海沢ふれあい農園の管理運営責任者である堀隆雄氏にインタビューしたところ、このような自然と関わりを持つところにくる利用者や働く地域住民は、皆それぞれに環境に対する意識が高い。とおっしゃっていた。海沢農園では23区・郊外に居住している人々が休日にやってきて余暇の一つとして農業を行っていた。また、農作業によってできた作物は販売に結びつく訳ではない。しかし、利用者は余暇を通じて自然環境の適正消費範囲を学習する上で大きな意義がある。

持続的に自然環境の保護をするには、その土地に住む人々の環境意識が高くなければならない。その事をふまえた上で市民農園は環境意識の向上に貢献する役割があると言えるだろう。

第3節 まとめ

昨今の貧困や紛争などと並んで、大気汚染や気候変動による地球温暖化などの環境問題は社会問題や国際政治問題の一つと位置づけられている。この環境問題を解決するにはミクロな視点の対策が不可欠であり、環境問題を解決しなければならないと人々が意識するように環境意識の向上をしなければならない。そういった社会情勢の中で市民農園は野菜や草花等の栽培を通して「生き甲斐の提供」「健康的でゆとりのある国民生活の確保」「良好な都市環境の形成」「農村地域の振興」などの役割を担ってきたが、新たに作物を栽培し、自然と関わる事で自分の自然の消費量を認識できるという重要な役割を担う事ができるのではないか。

注釈

1) 第1節の記述は工藤豊(2009)、木村謙二郎(2008)による所が大きい。

引用文献

- 1) 工藤豊「わが国における市民農園の史的展開とその公共性」日本建築学会 2009, 9 p2043-p2047
- 2) 木村謙二郎「都市型農園の現状と課題：ドイツの事例との対比」日本都市計画学会 2008, 8, 25 p39-p44
- 3) 農林水産省HP「市民農園とは？～事例～」
(http://www.maff.go.jp/j/nousin/nougyou/simin_noen/s_zirei/index.html)

第4章 蝦夷地開拓にみる八王子千人同心の組織文化

経営情報学部 20911307 三谷明史

はじめに

本章では、多摩地域で発足し、幕府より様々な公務を与えられ、最終的には土地開拓のために蝦夷地にまで渡り、のちの新選組にも影響を与えた八王子千人同心（以下 千人同心）にスポットを当てていく。

八王子千人同心は新選組と並び、多摩地域を語る上で欠かせない組織である。この八王子千人同心を題材に多摩における組織を考えることとする。

古来より現在の多摩地域が含まれる武蔵・相模の国は関東武士団（源義家・頼朝などにより組織化された武士の一群）や後北条氏、そして後北条氏ののちに関東に入った徳川家康など歴史に影響を及ぼした人物が多いことで注目されてきた。本研究では八王子千人同心という江戸開幕期に設立された組織を検討する。この組織は歴史的にはあまり目立たないが、東照宮警護や蝦夷地開拓など、実際には多くの功績をのこした。半士半農組織という組織形態に着目しそれを通して多摩地域とりわけ南多摩の人々の組織文化を理解することが本稿の目的である。

とはいえ千人同心の歴史は 260 年に上る。この千人同心の歴史のどの部分を用いて研究を進めるかが大きな問題となる。が、本稿では 1800 年と 1857 年の 2 度行われた蝦夷地開拓を選んだ。彼らはわざわざ江戸（多摩）から遠く蝦夷地まで行き 3 年間現地に滞在し開拓事業を行った。はたして蝦夷地開拓に赴く前と蝦夷地開拓時での組織形態はどうなったか。すなわち江戸勤務時の千人同心の組織構造と蝦夷地開拓時の組織構造は変化しなかったのか、あるいは新たな環境に対応して変化したのかを明らかにすることにより千人同心の組織対応能力を検討する。

第1節 千人同心の組織

第1項 千人同心とは

この項では八王子千人同心とは、もともとどのような組織なのかを簡単に説明する。

千人同心は半士半農の武装集団である。つまり平常時は田畑仕事を行い、幕命が下った際には幕府のために働く集団である。彼らは八王子を中心とする天領に住んでいた。

千人同心の歴史は戦国時代の甲斐国^(注1)にまで遡る。戦国時代の甲斐といえば武田信玄(1521～1573)が治めたことで有名な土地である。この武田家の中に小人頭(こびとがしら)という役職がある。この小人頭(中間頭ともよばれていた)は9人おり、それぞれが各30人ずつの小人・中間を預かり信玄の居館や領国内外を結ぶ主要道路を警護した。当時、武田家は寄親-寄子制^(注2)を採用しており、たとえば小人頭と小人の関係は寄親と寄子の関係とされていた。この寄子は同心と呼ばれることもあり、千人同心の呼称もここからきていると推測されている。千人同心の原型はこの小人頭に率いられていた軍事集団であったとされている。小人頭たちも家臣団に編入され「甲州九口之道筋奉行」として甲斐国国境警備を命じられていた。警備場所は9つである(図1参照)。



図1 甲州九口道筋奉行配置図

(八王子郷土資料館発行「千人のさむらい八王子千人同心」より)

このときの小人頭は250人程の小人を従えていたようであり小人頭-小人・中間の形態が千人頭-千人同心に移行していくことになった。これは千人頭と呼ばれる人が「九人-頭衆」や「甲州小人頭衆」と記述されているところから裏付けられている。

天正10年(1582年)武田氏が滅亡し本能寺の変で織田信長が死ぬと、甲斐の国は徳川家康の支配下に入る。このときの家康の施策は旧武田家臣をできるだけ登用し自らの家臣団に組み込むことであった。

彼らは慶長5年(1600)関ヶ原の戦いあたりから千人同心と名乗るのだが、その後も286年にわたり徳川幕府に属し、その間様々な公務を行っている。日光東照宮警護や江戸火消

し役・蝦夷地開拓などである。それだけでなく関ヶ原の戦いや長州征伐などの戦にも参加している。

しかしこの千人同心も幕末期、徳川幕府が新政府軍に敗北すると同時に解散してしまう。

第2項 組織構造・構成員

千人同心の組織は基本的には「千人頭—組頭—平同心」という形で編成されていた。千人頭は旗本身分で10名いたがそのうち8名が知行取り^(注3)で2名が蔵米取り^(注4)であった。千人頭はそれぞれ組頭と平同心を配下に持っていたわけだが、千人頭の名字をとって「原組」「河野組」などと呼ばれていた。組頭は各組に100名ずつおかれ、蔵米などが支給されていた。

平同心のうち100名は組頭の従者としての任務を帯びている持添抱（もちぞえかかえ）同心で900人が平同心だった。千人頭も合わせれば合計1010名の組織だったといえる。

この組織構造は「前期型・結成～1734年」「後期型・1735～1862年」「幕末型 1863～1868年」という変化をとげる。このうち、もっとも長かったのは後期型であり、組頭・平同心といういわゆる千人同心という名前でイメージされる組織形態はこの時期に確立された。

幕末型というのは第2次長州征伐の敗戦の反省から行われた再編成である。この時期、幕府は槍中心の軍事組織を解体し、銃隊に移行しつつあったが、長柄という長槍の一種を武器にしていた千人組も例外でなかった。今までは千人頭10人が各々一組ずつを担当していたが、銃隊に組直したのを機に千人隊之頭が全ての組を一括して統括するという形になった。銃隊組直しの時期は不明だが慶応2年（1865）10月、千人頭は千人隊之頭に、千人同心は千人隊に改称しているなのでこの時期前後だと推測される。

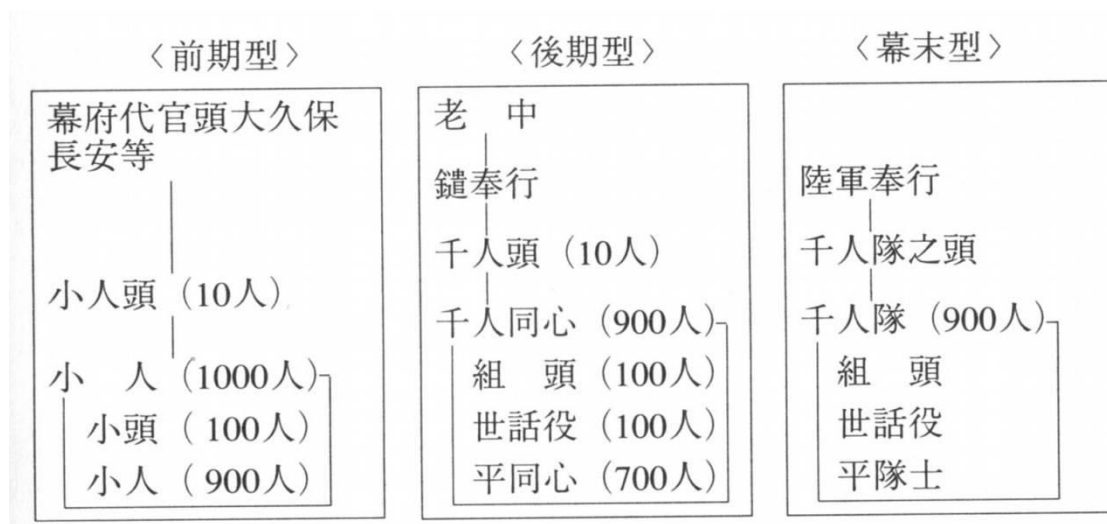


図2 千人組の組織の変化

(吉岡孝 「八王子千人同心」より)

後期・幕末の千人同心の幕府内での身分は正確にはわかっていない。しかし吉岡孝著の

『八王子千人同心』⁸⁾ や、八王子郷土資料館発行の『千人のさむらい八王子千人同心』⁵⁾ によると直属の部署は槍奉行ということであった。この槍奉行の、幕府内における軍備のなかの槍を担当する奉行所であったが、平時は閑職であったことから、千人同心の位置づけもそれほど高くはなかったのではないと思われる。

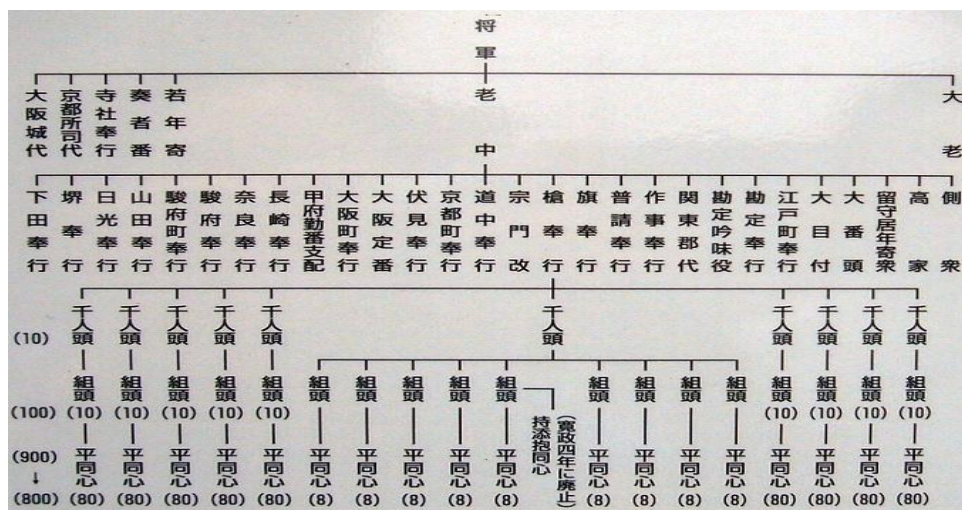


図3 幕府と千人同心の組織（後期型）

『千人のさむらいたち八王子千人同心』より

千人同心は10組の頭のもとに100人ずつの組に分けられていたが、この各組100人の出自を明らかにすることは不可能である。

第2節 日光・江戸での千人同心

この章では、後述する蝦夷地での千人同心の組織との比較をするために、蝦夷地開拓以前の千人同心の活動・組織などを説明する。

第1項 日光勤番

千人同心は八王子という名がついているが、実際の公務には八王子はあまり関係していない。千人同心の主な公務は前述のとおり甲斐国の国境警備である。しかし徳川の太平の世になるにつれて国境警備の重要性が薄れてきた。そこで幕府は千人同心に別の公務を与えたわけだが、それが日光勤番（東照宮がある日光山の防備）であった。具体的な任務は日光の防火役であった。この日光勤番を最初に命じられたのは承応元年（1652）のことで、これ以降幕末にいたるまでこの公務は続けられている。なお千人同心の江戸時代を通じての唯一の任務がこれにあたる。

そもそも、なぜ八王子に拠点をおく千人同心が日光山の防備を行うことになったのか。これには先に述べた国境警備の重要性が薄れたという理由もあるだろう。ただ千人同心と

日光山の関係は承応元年より以前、元和3年（1617）2月の家康の遺骸の日光山安置に従ったのをはじめとして、その後の家光の遺骸安置および秀忠・家光および家綱の3将軍の日光社参に供奉するなど、関係は強かった。しかしこれは臨時の公務であり正式に防備を命じられたのは慶安5年（1652 - 9月18日承応と改変）のことであった。そのときより日光山と千人同心との関係が本格的に生じたのである。

日光勤番は千人頭2名とそれぞれの頭が指揮する組の同心50名ずつ、つまり100名で構成されていた。そしてこのなかには各組5名ずつ合計10名の組頭が含まれており、50名を1つの期間として10組が交代で勤番を務めた。

第2項 江戸勤番

千人同心の防火役としての公務は日光だけではない。わずか3年間だが江戸の火消し役も務めていた。しかしこの江戸勤番に関しては期間が短かったこともあり、資料もきわめて少ない。宝永元年（1704）10月7日、老中より千人頭3名・同心300名をもって府内（町奉行の支配する江戸の市域）の火之番を命じられたが、課役繁多を理由として頭2名・同心200名に減少するよう嘆願した。翌2年（1705）1月28日、江戸火消し役は2組200人（頭2名・同心200名）在番期間を50日とし、日光勤番は従来通りと定められた。

第3節 蝦夷地に行くことになった経緯

第1項 緊迫のロシア南下政策

この項では千人同心の蝦夷地移住のきっかけともなったロシアの南下政策について簡潔に述べる。

17世紀末から18世紀の初めにかけてのロシアはピョートル大帝治下でシベリア経営が積極的に進められていた。中国とネルチンスク条約を締結し、その勢力は17世紀末にはカムチャッカ半島に達し、ベーリング海峡を越えてアラスカにわたり北太平洋の毛皮獣捕獲による巨利を占めるにいたっていた。さらにロシアは千島列島沿いを南下し蝦夷地にも興味を示すようになってきた。18世紀後半になると鎖国時代における最初の通商要求といわれるラクスマンの根室来航（寛政4年（1792））などに見られるように北方問題が緊迫化してきた。このとき幕府は石川忠房、村上義礼を松前藩に派遣し応接させた。ロシアの要求に対しては日本が鎖国体制をとっていることを説き、ラクスマンが持参した国書・方物を返し、「交渉は長崎に限る」ということを告げ、長崎入港証である信牌と食料・薪水を与えた。しかしラクスマンは長崎に向かわずそのまま帰国した。

このロシア船来航を機に、幕府は諸大名に国防を命じ、ラクスマンが江戸直航の意向をうかがわせたこともあり、江戸湾の防備に力を注いだ。実にペリー提督が神奈川県浦賀に来航する63年も前の話である。



図4 ラクスマン来日航路（「北海道ぷっちがいでhp」より）

このように南下するロシア人との接触が頻繁になるにしたがって、幕府は国防の必要から蝦夷地を重視するようになり、調査隊を派遣する一方、寛政10年（1798）末この問題を取り扱う部署として蝦夷地取締御用係を設置し、翌11年には東蝦夷を幕府が直接支配することにした。当時蝦夷地は松前藩の領地であったが蝦夷地の幕府直轄支配は1798年から1829年まで続くことになる。

このような幕府の動きに応じて千人頭原半左衛門胤敦（以下胤敦）は千人同心子弟を率いて蝦夷地に渡り防衛の任務につきたいという願書を寛政12年（1799）3月に提出した。

なぜこのような申請をしたのかという理由については、千人同心の子弟である厄介^{（注5）}といわれるものたちのいわば就職問題に対する解決策とする説がある。この願書に対する許可が出たのは翌12年（1800）1月14日であった。

第2項 旅立った千人同心たち

千人同心として蝦夷地に向かったものは合計160人である。内訳として第1陣100名、第2陣30名、第3陣30名である。

寛政12年（1800）3月20日に胤敦の弟・新介が43人を率いて出立、翌日57人とともに胤敦が出立した。第1陣である。このメンバーは、奥州道中を経て津軽半島の三厩から海路松前へ渡り箱館にいたった。さらに、箱館から陸路67里（約260km）の勇払（現・苫小牧）へは新介が50人を率いて向かい、144里（約565km）の白糠へは胤敦が50人を率いて海岸線をたどったのである。しかし、厳しい寒さと冬をしのぐ住宅構造や建具の不備から病死者や帰国者が続出した。

なお同年の秋にはこの第1陣の後続と欠員補充のための募集が行われたが、応募者は30人にすぎなかった。過酷な状況が伝わったのか、幕府は当初100人を予想していたがこのような結果になってしまった。このメンバーも先のメンバー同様に勇払・白糠に向かったのである。

なおこの道中で千人同心一行は測量家である伊能忠敬^{（注6）}と出会っていることは特筆さ

れるべき事項である。

第4節 蝦夷地での千人同心

第1項 蝦夷地移住とは

千人同心（千人同心を含むその子弟・一族）の蝦夷地警備・開拓のための移住は2回（第1回目は寛政12年（1800）、第2回目は安政5年（1858））にわたって行われた。しかしこの千人同心の蝦夷地移住に関する資料は乏しく、氏名人数を明確にすることも不可能なのが現状である。

第1回の千人同心の蝦夷地への移住は蝦夷地農耕開拓の団体移住の最初であり、北海道の屯田兵の原型と言われながらも不明な点も多い。特に八王子にはこれに関する資料が極めて少ない。わずかに塩野適齋の『桑都日記』などがあるのみである。

資料が少ない理由としては統率者である原胤敦・新介兄弟の残した資料が残っていないからである。元来原家は出立する以前に3度、帰郷後3度の火災にみまわれており、これにより伝来の資料はほぼ焼失してしまったのである。また白糠・勇払など移住現地にも資料は極めて少ない。

当時の状況として、蝦夷地は未開不毛の地であり和人で永住する者も少なかった。奥蝦夷はアイヌ民族の居住地であり、この地を外国から守るには和人を永住させて土地を開拓させ警備を厳しくする必要があった。しかし、これは至難なことだったので幕府の方針としては事を荒立てず露国の衝突を避けてその南下を択捉でとどめ、土地の開拓・夷人の撫育に専念することにしたのだ。

第2項 第1回職務内容・成果

千人同心の蝦夷地における職務は警備と開拓であったが主には開拓のほうであった。開拓は白糠および勇払で行われた。

①白糠での活動成果

原胤敦は65人を率いて白糠へと向かった。音別・庶路などの海岸一帯の地に駐屯して警備・開拓・土木などに従事した。移住の年の7月には早くも畑5,6反が開墾され大豆・豆・小豆・蕎麦などが植え付けられた。3年目の享和2年（1802）には開墾面積は20町歩（198,340㎡）ともいわれ収穫も大根3万本・五升芋5斗・菜種1斗・大麦2斗・粟2斗・蕎麦5斗およびその他の野菜類にもおよんだが自給自足の食糧としてはあまりに少なすぎた。このように食糧の欠乏と寒気のため帰国者・病人および死者が続出、湾月町国泰寺の過去帳によれば文化元年（1804）春までに死者16人を数えた。

この年2月に原胤敦は箱館奉行支配調役に任ぜられ手附の者は「地役御雇」となって各地に散在して警備・開拓に従事した。白糠の屯田開拓は4年で放棄されたが、勇払に比べると気候風土の関係から成功の度合いはもともと少なかったのである。しかしながら屯田以外に土木、採掘および警備についてはやや注目すべき成果があった。寛政12年（1800）

12 月原胤敦手附の者が阿寒山の硫黄・明礬などの鉱業資源の発掘に従事し、あるいは享和元年（1801）5 月胤敦が命をうけて斜里山道を開さくした。同年 2 月幕府より役人 2 人がエトロフ島から礼常丸に乗船してウルップ島に渡った記録には「八王子の人同心二人」とあり、これは胤敦手附の者に違いなく、その功績も皆無ではなかったわけである。

②勇払での活動成果

原新介に率いられた 65 人はまず勇払に駐屯して、白糠の胤敦配下の者と連絡を保ちながら警備・屯田・交易・土木に従事した。鵠川領汐見地区に移住して開拓作業を行った。

翌年の享和元年（1801）、初めて村の形体を作った居住同心の数は約 20 人といわれ小屋が 13 軒ほどであった。しかし文化 3 年（1806）にはすでに狐狸の棲家となっていたと伝えられている。

開墾も享和 2 年（1802）には畑地数 10 町歩、収穫は大根 1 万 8 千本、大麦 2 石 7 斗、小麦 8 斗、粟 8 斗、粟 2 斗、大豆 13 石 9 斗、蕎麦 8 石 6 斗、黒豆 7 斗 4 升、菜種 2 斗に及んだ。

現在鵠川町汐見区の「原半左衛門手附の者」の住居跡と伝えられている場所は、鵠川河口東岸の砂浜のアイヌ部族の中にあるが、現存の資料は皆無である。また鵠川以外では浜厚真（厚真町）、沙流河河口（門別町富川付近）にも分散して居住、沙流河では 15～6 名で鉄砲 7～8 挺を備えていた。

移住後の 1 年は住居および道路建設に費やしたが翌年は病気にかかるものが多く、移住後 1～2 年の間に 65 名中 16 名が病死という惨状だった。農作物もあるていど収穫があったが白糠同様に食糧不足と寒気のために失敗したとみられる。

しかし新介は文化元年（1804）有珠・虻田牧場の牧場支配取調役に任命され経営にあたったが、これは北海道における牧場の創始として北海道畜産史上特筆すべきことである。

このような成果もあり、現在では苫小牧市と八王子市は姉妹都市となっている。

第 3 項 第 2 回職務内容・成果

第 2 回目の千人同心による蝦夷地移住は 1858 年から開始された。背後の時代情勢としては箱館開港などに伴い、再び北辺の防備を幕府が痛感したからである。松前藩へ上知令を発令、蝦夷地のほぼ全域を没収し、そこに箱館奉行所を開設、その所管に属させた。経営方針としては前幕領時代と同じで警備・開拓が基本方針であった。また幕臣・諸藩の士卒に蝦夷地在住を奨励し土地を下附し、または資金を貸与して墾田・牧畜・採鉱・伐木・製材・鯨漁などに従事させた。

このときにあたり八王子千人同心子弟がその在住（耕作・養蚕・織物に従事）を願い出て許され、再び蝦夷地に渡ったのである。実に第 1 回目の移住より 59 年目のことである。

第 1 陣は秋山幸太郎^(注7)・野口宗十郎などであり、秋山幸太郎は妻子をつれて安政 5 年（1858）4 月出立、第 2 陣は同年 8 月に出立した秋山惣七など 7 人、第 3 陣は翌 6 年（1859）2 月出立の栗平金平^(注8) など 15 人である。その手当は 1 年 1 人 15 両^(注9)、他に支度金 1

人7両（厄介は2両）道中旅費1人3両であった。

その後も在住の者は増加したらしいが正確な人数は不明である。当初移住者は約300名にも上る予定であったが実際は半数程度、さらにこの内純粋な千人同心子弟は約80名でありそのほかは千人同心とは名ばかりの浮浪の徒であったという。これらの千人同心は秋山幸太郎が世話役となり箱館奉行栗本鋤雲の指揮下に属した。鋤雲は幕府の医者で安政5年（1858）に蝦夷に移住、病院・薬園・養蚕施設などに多大な功績を残した人である。

秋山幸太郎が世話役となり蝦夷地に入った千人同心子弟は七重村薬園前・藤村郷（いずれも七飯町）の2か所にわかれて居住し、耕作・養蚕・織物などに従事した（七重村は後に有名なガルトネル事件^{（注10）}の舞台となる）。

開墾にあたっては当初大きな問題があった。千人同心（浮浪の徒）は有河村（上磯町）に寄留して、前渡しの家作資金・紡織機械代金などをすべて酒食に費やし一向に服務しなかったのである。仕方なく鋤雲は、自ら山野に入り建築材料を調達し藤村郷に家屋を造りそこに居住させ、暫く薬園の本務に服させた。

そこで最も活躍したのが秋山幸太郎である、桑を輸入し七重村近辺の自生の桑と接木して栽培に成功した。やがて養蚕も軌道にのり、郡内織・黒八丈・縞七々子を織り出すにいたった、これこそ蝦夷地織物の原点でありその功績は大きなものがあった。

なお第2回の蝦夷地移住者に関しては、秋山幸太郎・栗平金平の二人については大体あきらかなのだが、その他の移住者の消息は全く不明である。そして幕末まで残留した純粋な千人同心は約40名であり、この残留者の多くは秋山幸太郎と共に官軍に属し、旧幕府脱走軍を迎撃した。

①在住当初より箱館奉行の配下に属して警備・開拓に従事した。第1回は4年目まで独立して行動しており、箱館奉行の庇護も少なかった。

②移住場所が箱館周辺で白糠・勇払に比べて気候が温暖・土地も肥沃、箱館奉行所とも近く食糧などの物資の補給も容易だった。

③第2回の移住が行われた時代の箱館奉行所の蝦夷地経営策が以前より積極的であり、開発もある程度進んでいた。

諸点よりして第2回はある程度の成果をあげることができたが、不幸にも旧幕府軍の来襲によって四散してしまった。両度の蝦夷地移住は八王子千人同心史上並びに北海道開拓史上特筆さるべき事業だったであろう。

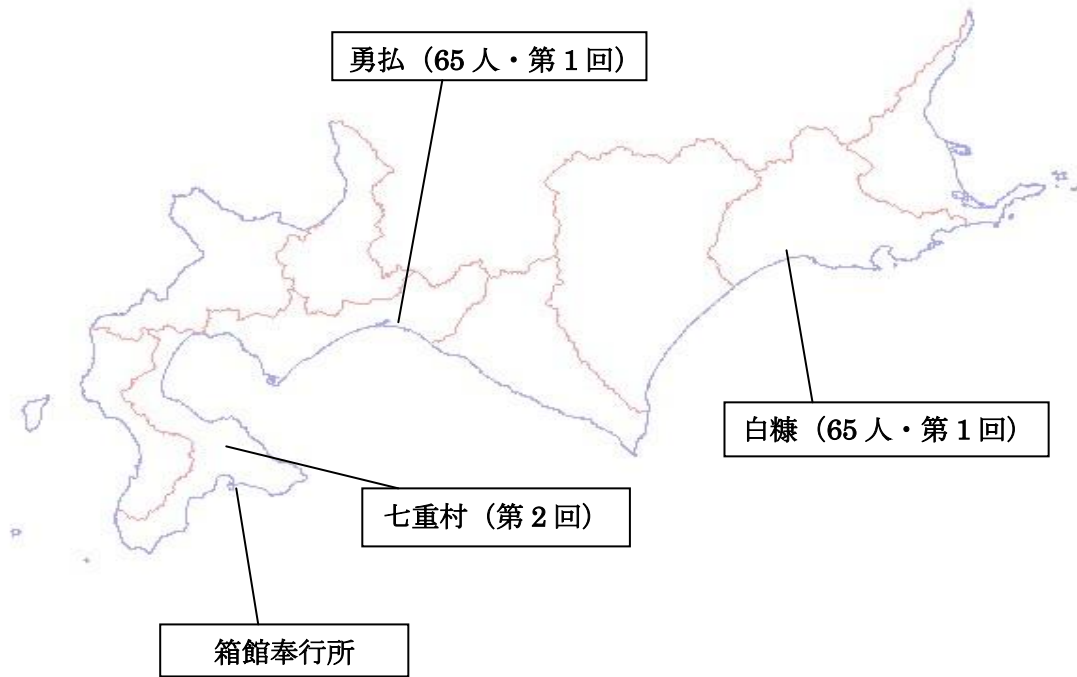


図5 千人同心居住地

第5節 組織の比較

第1項 蝦夷地開拓前と開拓時での組織構造の差異

この項では蝦夷地開拓以前と開拓時の千人同心を、環境・活動内容・滞在期間・人数・組織図の5項目から比較してみる。

表1 江戸勤番・日光勤番時と蝦夷地開拓時における環境・組織の比較

	日光・江戸	蝦夷地
環境	適応しやすい気候	適応するのが むずかしい気候
活動内容	日光:警備・火消し役 江戸:火消し役	警備・開拓
滞在時期	日光:1652年~1868年 江戸:1704年~1708年	第1回:1800年~1804年 第2回:1858年~1868年
人数	日光:千人頭2名 同心100名 江戸:千人頭3名 同心300名 のちに 千人頭2名 同心200名	第1回:第1陣100名 第2陣30名 第3陣30名 第2回:第1陣118名 第2陣7名 第3陣15名
組織	日光:千人頭-組頭-平同心 江戸:千人頭-組頭-平同心	千人頭-手代-肝煎 -小屋頭-平同心

表1を見てみるとやはり千人同心にとって蝦夷地開拓という公務は特別な仕事だったことが伺える。活動内容においてはこれまでの千人同心は警備や火消し役が主だったのに比べて蝦夷地では開拓が主な仕事だった。滞在時期は日光勤番が千人同心唯一の江戸時代を通じての仕事であり、およそ210年間に渡って行われていた。蝦夷地開拓は第1回目が4年、第2回目が10年と比較的短期間である。これは事前に立てた計画がずさんだったことや蝦夷地の気候が予想以上に厳しかったことなどが予想できる。

この表で特筆すべき項目は組織面である。蝦夷地へ赴く前は千人頭 - 組頭 - 平同心という3段階の組織構造だったが蝦夷地で警備・開拓を行っていたときの組織構造は千人頭 - 手付 - 肝煎 - 小屋頭 - 平同心という5段階の組織になっていたのだ。肝煎・小屋頭・平同

心は白糠・勇払に振り分けられた。図6はこれらの5段階組織を詳細に分けたものである。

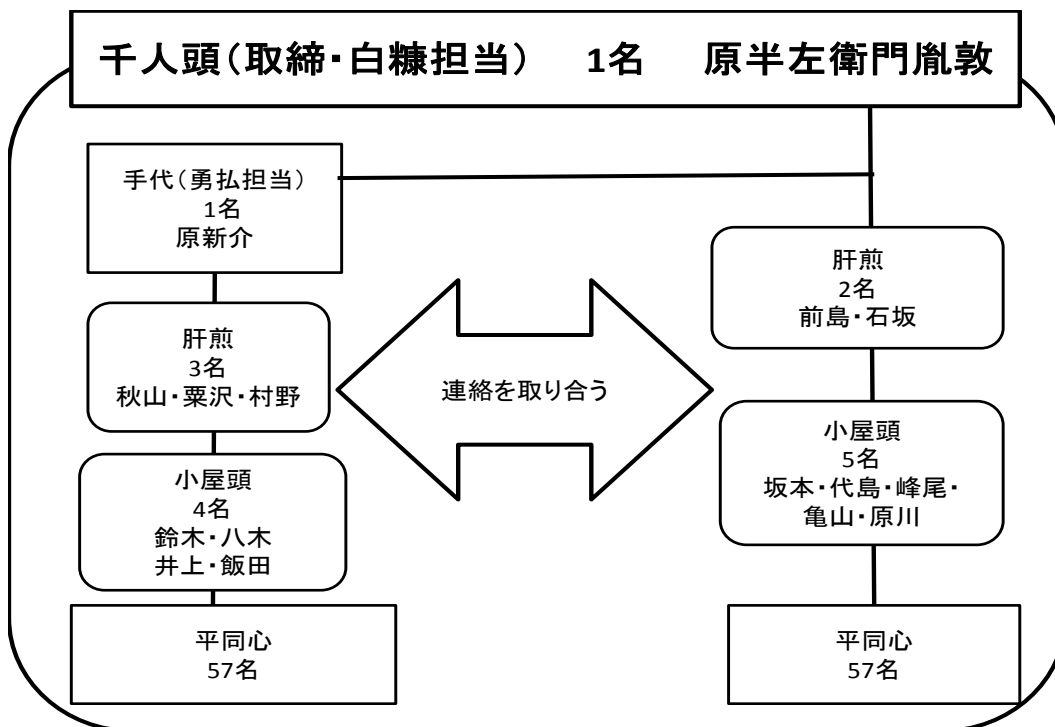


図6 千人同心の蝦夷地における組織図

取締役は千人頭の前半左衛門で白糠担当である。勇払は前半左衛門の弟の前新介が手付の者として担当した。そして肝煎・小屋頭は仕事としてはそれぞれの補佐であることから均等に白糠は肝煎り2名・小屋頭5名が割り当てられた。勇払には肝煎3名・小屋頭4名と振り分けた。平同心は半分ずつに57名となっている。

第2項 考察

日光・江戸勤番時と蝦夷地開拓時の組織を並置した図を図7に示す。

図7からわかることは3段階か5段階に組織階層が増えているということである。千人同心の原型は武田家にあるということは第1章で述べた通りで、当時より寄親・寄子制を用いていた。日光勤番や江戸勤番においてはこの寄親・寄子で通用したのだが、蝦夷地の環境などではこの制度では通用しなかったのであろう。

役職が増えた理由としては蝦夷地の環境が予想以上に厳しかったことや取り仕切る人が1人では足りない（仕事が細かかった）などが考えられる。推論としては行政の仕事を千人同心がやらざるを得なくなったのではないだろうか。江戸・日光時は幕府が直接行っていたが図5で示した通り奉行所から白糠・勇払は遠い場所にある、よって蝦夷地での幕府の支援は微弱なものであり、行政の仕事なども増えたものとする。

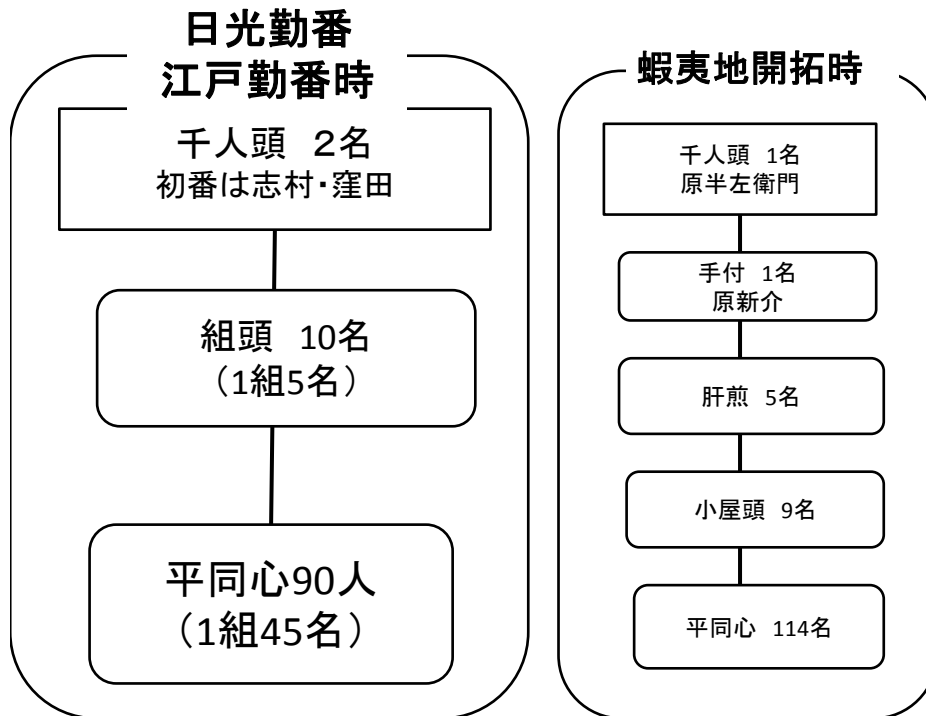


図7 日光勤番・江戸勤番時の組織と蝦夷地開拓時の組織図

第6節 まとめ

以上5節にわたり八王子千人同心、とりわけ蝦夷地開拓についての研究内容を論じ、組織文化についての考察を述べた。

蝦夷地から八王子に帰還した千人同心のその後としては、再び通常の農耕と日光勤番に戻ったとされるが、八王子に大きな影響をもたらしたということもいえる。それは千人同心の地理意識の変化である。第1回蝦夷地開拓に千人頭(取締)として参加した原半左衛門胤敦だが、文化11年(1814)から組頭である塩野適斉^(注11)、植田孟しん^(注12)らと『新編武蔵風土記稿』や『新編相模国風土記稿』の編纂に従事していた。幕命ということもあるだろうが、それだけでなく蝦夷地へ渡り伊能忠敬と出会い、八王子との違いや、組織を変化させざるを得なかったことを体験し、日本の広さを理解した結果だと思われる。そして、文政5年1822年に『新編武蔵国風土記』が完成した後も、文政10年(1827)には塩野適斉が現在では八王子地区研究の第1級資料となっている『桑都日記』を編纂した。また植田孟しんは文政3年(1820)に武蔵名勝図会を完成させ、その後も4冊あまりの著書がある。

これらの貴重な地理書が現在に残っていることから蝦夷地における八王子千人同心の公務はその後の八王子・多摩地域・北海道に大きな影響を与えたことがいえる。

注釈

- (1) 甲斐の国：現在の山梨県、戦国時代は武田氏、本能寺の変後は徳川氏が治めた
- (2) 寄親 - 寄子制：戦国時代の軍事組織の根幹。寄親は有力家臣を指し、軍事編成の上の組頭、寄子は寄騎あるいは与力、同心などとも称される
- (3) 知行取り：知行地が決められ、そこで徴収される年貢が与えられる
- (4) 蔵米取り：将軍に納められた年貢から支給される
- (5) 厄介：その家の2男や3男
- (6) 伊能忠敬：江戸時代の日本の商人・測量家（生没 1745 年～1818 年 享年 73 歳）
- (7) 秋山幸太郎：八王子千人同心千人頭。第2回蝦夷地開拓において功績を残した、旧幕府軍が蝦夷地へ上陸すると官軍属し戦うが戦死（生没 1826 年～1868 年 享年 41 歳）
- (8) 栗沢金平：八王子千人同心組頭。第2回蝦夷地移住者。旧幕府軍が蝦夷地へ上陸するとそちらに身を投じ五稜郭に立て籠もったが降伏、その後は松本藩お預けとなった（生没 1839 年～1889 年 享年 50 歳）
- (9) 1両の値段：1両は約12万円である。手当15両はしたがって180万円ということになる。
- (10) ガルトネル事件：ドイツのガルトネルという貿易商が七重村の土地を借りて（契約して）西洋農業を行っていた。母国からりんごなどを取り寄せて日本で初めて栽培をしていた。しかし明治政府がおこり新政府は外国資本を排除する方向性を打ち出したため、契約解除の交渉が行われ、ガルトネルに賠償金を支払い契約解除をした。これがガルトネル事件と呼ばれるものである。
- (11) 塩野適斎：八王子千人同心組頭（生没 1775 年～1847 年 享年 72 歳）
- (12) 植田 孟縉：八王子千人同心組頭（生没 1758 年～1844 年 享年 86 歳）
著書は『日光山志』『日光名勝考』『鎌倉名勝図』『浅草時旧跡考』など

参考文献

- 1) 岸本安則 『蝦夷地ゆうふつ原野』 北書房（1983）
- 2) 白糠町 『白糠八王子千人同心隊』 白糠町（1984）
- 3) 八王子市教育委員会 『八王子千人同心史通史編』 八王子市教育委員会（1994）
- 4) 八王子市教育委員会 『八王子千人同心の群像』 八王子市教育委員会（1996）
- 5) 八王子市郷土資料館 『千人のさむらいたち～八王子千人同心～』 八王子市教育委員会（2005）
- 6) 八王子市史編纂委員会 『八王子市史』 八王子市役所（1957）
- 7) もりたなるお 『千人同心』 講談社（1998）
- 8) 吉岡孝 『八王子千人同心』 同成社（2004）

第5章 八王子織物産業の形成と衰退

経営情報学部 20621063 高橋豪

はじめに

この論文は、生糸・織物を通して多摩の地域性(ローカリティ)と国際性(グローバリティ)の移り変わりを把握することを目的とする。

日本の近代化にあたり、一番初めに世界が日本に求めた産物は「生糸・織物」である。織物業は、日本で全般的に農業の合間に行う副業であったが、開国後の世界の需要拡大に伴い、明治時代以降日本の一大産業となった。この「生糸・織物」を追いかけることで、地域産業と世界のつながりの一端を明らかにする。

第1節 養蚕業と絹織物業

養蚕業(ようさんぎょう)とは、蚕(かいこ)という蛾の繭(まゆ)から作られた天然の繊維を使って生糸と呼ばれる糸を作る産業である。発祥は中国と言われており、紀元前3000年から人々に使われてきた。他の繊維と比べて、稀に見る光沢と肌触りの良さ、保湿性・吸湿性・放湿性などの点から古来より身分の高い者が使う高級品として位置づけられてきた。

絹織物業は、大きく見て、養蚕→製糸→撚糸(ねんし)→染色→製織(せいしょく)(製織→染色の場合もある)という製造工程を経て絹の反物を作り、織物業者が服や生活物に仕立て、販売するまでの産業である。この中で、織物業者が多種に富んでおり、有名なものは、京都の西陣織・群馬の桐生織(西の西陣、東の桐生と称される)や福岡の博多織、奄美大島の大島紬、北海道の優佳良織など、日本の各地域で特有の織物が発達した。

八王子には「多摩織」が現在も残っており、昭和55年に通産省から伝統工芸品に選ばれている。

第2節 養蚕をなぜ八王子で行ったか？

養蚕は生き物を扱う仕事なので様々な要因に影響を受ける。まず気候が影響する。蚕は温度と湿度にとっても敏感である。その為、養蚕家は室内で蚕を育て、部屋の中で薪を焚き温度調節をしていた。八王子は、東京の西の山岳地帯の中に盆地状に形成されている。周りには森林が生い茂り、江戸でも有名な木炭産地であった。このお陰で、養蚕家は木炭にこと欠かさなかった。蚕は湿度にも弱い、囲炉裏を作り乾燥を図っていた。

次に、養蚕に使う桑についてである。桑は蚕の飼料として必要とされるが、適応範囲が広い植物である。土質は多湿なところ以外では適応範囲が広く、排水良好な砂利質では葉の育ちがよく、壤土の土地ではよく繁茂する。八王子は、先に述べたように山岳地帯であ

る為、田んぼが作りにくい環境であった。又、関東ローム層が広がっていたので極めて酸性度が高い地形である。この悪環境の中で育つ農作物が桑だったのだ。

また、八王子は浅川を起点とした支流も多く、織物の製糸と染色に必要な不可欠であった水も多く存在したのである。こうした状況下の中で農家が選択した産業は養蚕業であった。

第3節 八王子と織物の歴史

第1項 古代～江戸時代前期の八王子と織物

八王子の絹の始めは、大和朝廷時代と言われている。「新編相模原風土記稿」佐野川村のくだりに 471 年雄略天皇が桑の適地の国や県に桑を植えさせる勅令を出したとある。それを受けた佐野川の住人、多強彦(おおすねひこ)という人物だった。津久井は大変狭い土地なので、もっと広い多摩の横野の原(現在の八王子と思われる)に桑を植えてそれを近くの国々へ分けたと書かれている。このことは千人同心の塩野適齋と八木かん右衛門が「日本書紀」を引用して「新編相模原風土記稿」に書いている。

また、奈良時代には都周辺に住んでいた渡来人に対し、現在の埼玉県高麗郡、次に新羅郡(新座郡)へ移動が命じられ養蚕の技術や機織りの技術が多摩圏に根付くきっかけとなった。多摩の絹を題材とする歌が奈良時代に書かれた万葉集の歌の中にあり「多摩川に曝す手作りさらさらに何そこの児のここだ愛(かな)しき」{多摩川にさらす手作りの布のように、さらさらに、どうしてこの子がこんなにかわいいのか}がそれである。また、租庸調の調として官に納めた布、という意味で調布という地名が現在も残っている。

平安から鎌倉時代の始めに活躍した西行法師は「あさかわをわたればふじのかげきよく桑の都にあおあらしふく」と歌った。この時西行法師が八王子の景観を見て「桑の都」と言ったのが桑都(そうと)の語源だといわれている。

時代は下り、戦国時代には八王子近辺は後北条氏が支配していた。八王子にあった滝山城・八王子城の城主である北条氏照が作ったといわれている「桑都青嵐」の中で城下町の風景を歌ったものが残っており、それには「蚕かふ桑の都の青あらし、市のかりやにさわぐもろびと」と書いている。このことから戦国時代に八王子は織物市として成立していたのではないかと思われる。

江戸時代前半には、八王子宿は市場(六斎市→六日の日に行われる市)としての役割が強く、そこで売られる物は近隣の村々から集められた品だった。織物も周辺の村々から集められた。津久井には「川和縞」という江戸時代後半期に生産されていた大変有名な織物がある。津久井や周辺の村々から集められた織物を八王子に集め、江戸へと運んで、江戸地廻り商品として江戸庶民に供給していった。八王子は織物の生産地でもあり、集積地の役割も果たしていった。

八王子織物自体が全国的に有名になったのは江戸時代前期の正保2年(1645)に出た「毛吹草」という俳諧に「滝山横山紬島」という名前で、八王子織物が紹介されたのが契機であった。さらに元禄5年(1695年)は蚕の卵である蚕種を扱う商人たちの全国的な会議が八

王子で行われたとの記録が残っている。以上の事が重なり、八王子の織物市は次第に大きくなり、織物の市は午前中、他の市は午後からと、時間で分ける方法がとられた。これが「桑都朝市」の始まりである。また、津久井の織物は「毛吹草」が出る前から年貢として納められていた。時を同じくして「毛吹草」に青梅の「青梅縞」という織物が紹介され掲載有名になった。

第2項 江戸後半期の八王子と織物

江戸後半期、宝暦7年(1757)6月に八王子宿にて三河屋与五兵衛事件が起こった。この三河からやってきた人物は買継商(かいつぎしょう)で、土地の名主と結託して幕府に上納金を納める代わりに八王子に集まってくる織物から税金を取って町の利益にしようと考えた。しかし、これを知った周辺の村々の織屋農民と、村の織物を八王子に運ぶ買継商が結束をして、五兵衛に反対し、彼と結託をした宿の名主に焼き打ちをかけた。これは千人同心の「桑都日記」に大事件として記載されている。この事件から、周辺の村々の織屋農民と買継商が大変な力を持っていたことが読み取れる。

文政年間(1818~29)に入ると、八王子の市の知名度が全国的に上がっていく。この頃まで全国の市・生産地・商業の取引の中心は、西は京都の西陣、関東は東の西陣こと桐生だった。そのほか関東には足利・伊勢崎があり、この三市と並び称される形で八王子の名前が全国的に知られるようになった。八王子で取引していた織物は、地元の物を除けば

甲州郡内の「甲斐絹」かいき
津久井の「川和縞」
信州の「上田縞」
八丈の「岸島」
青梅の「青梅縞」
秩父織物

がある。これら多種の絹織物が八王子で取引されていた。

この時期に八王子織物は、江戸だけでなく全国的に広がっていった。特に関西市場の開拓が著しく進んだ。古来より関西は文化の中心として栄え、江戸時代が始まって江戸は政治を取り仕切る場所、関西は文化の発信地として捉えられていた。しかし、幕末にかけて江戸は文化的にも中心となり、関西に影響を及ぼしていくようになる。八王子織物は江戸からの刺激を受け、洗練向上に努力した結果、全国的にも認められるようになったのである。

それと同時に、先進地帯であった桐生や足利から機業家達が八王子に移住してき、八王子の生産地帯や機業地帯に先進技術をもたらした。具体的には、地機から高機(半京機)が導入された。

しかし、良い事ばかりでもなく、天保年間に入ると縞買仲間(反物を買う商人)から織屋

農民への不良品のクレームが増えた。反物は、重い物が良い物とされていた為、糊を混ぜた反物が相次いで出荷された。糊は風合いを良くするために入れられる事もあるのだが、重さを出すためにも入れられた。他にも八王子織物は幅が狭い、丈が短いなどの問題があった。この一大事に織屋農民は、山形の米沢では染める段階で重さが出ると聞き米沢まで行って研究をし、明治時代に入ると反物を鑑別する縞買仲間に代わり、織物協同組合がつくられた。

第3項 明治時代の八王子と織物(開港編)

寛永6年(1853)6月3日、ペリー来航を機に八王子織物は大きく変わっていった。江戸幕府がペリーの黒船に開国を迫られ、神奈川・長崎・箱館(函館)を開港する約束をした。この中で日本の中枢が集まる江戸に一番近い港は神奈川(現在の神奈川県横浜市神奈川区神奈川本町、青木町付近)であるが、神奈川は開国以前から京都と江戸を繋ぐ東海道の要所で重要な神奈川宿があった。まだ開国から間もない日本では、鎖国派の武装集団に外国人が襲われる事件が懸念された。そこで幕府は、神奈川の近くの横浜村(現在横浜市中区の関内付近)にある港を神奈川の代行として開くという意向で「神奈川は大きいので横浜も神奈川の一部である」と諸外国に伝え、横浜港が開港したのである。諸外国は話が違くと神奈川宿周辺に領事館を作った。しかし、横浜開港後は居留地である横浜での取引が活発化し、横浜が外国人向けに整備されるなどの結果から諸外国も横浜開港を受け入れた。

日本の横浜開港後、諸外国への輸出の花形は生糸と蚕紙であった。この頃、ヨーロッパ(特にフランス)では深刻な蚕の病気が流行り、よい生糸が生産できず、世界的に生糸の価格が高騰していた。そこで大陸と隔離された日本で良い生糸が安く手に入ると聞いた外国商人はこぞって日本の生糸を買いに来たのである。ちなみに、横浜開港から1年後の1860年の日本の総輸出中、横浜港が占める比率は83.5%であり、横浜輸出額の中の生糸比率は65.6%である。その後もっとも多い時は1865年で、日本の総輸出中横浜が占める比率は94.5%で、横浜輸出額の中の生糸比率は83.7%まで上昇する。こういった生糸の多くは、始めアメリカに輸出され、主に衣服の素材として使用されたが、後に靴下や下着の素材として使用されていく。

外国人に生糸が売れると知った日本の商人たちは日本の生糸を買い集めた。この頃、長野・山梨・群馬・栃木・福島の内陸地域は養蚕業が盛んで、「東山養蚕地帯(とうざんようさんちたい)」と呼ばれ、そこから八王子の織物市に生糸が集まりそれを横浜に運んでいた。八王子に生糸が集まった理由は元から織物市があったことと、東山養蚕地帯と横浜港を繋ぐ中間地点に八王子あるからだと考える。この八王子から横浜までを繋ぐ道を「浜街道(絹の道)」と呼ぶ。

第4項 明治時代の八王子織物(浜街道・鎌水商人編)

横浜開港に当たり多くの外国人が日本を訪れた。それは商人だけでなく、外交官・学者・

宣教師など多くの職業の人が日本について記録を残した。しかし、自由に歩けるわけではなく、外国人の歩ける場所は決まっていた横浜周辺外国人遊歩区域を使っていた。それが浜街道で、八王子まで歩けるようになっていた。その後外国人が幕府に申し入れをし、日本の各地を歩けるようになり、「日本旅行案内」というガイドブックが出されたが、どのコースも最初は浜街道を通過して各地に行くものだった。

又、この時に横浜の治安整理も懸念され、八王子千人同心が、1863年に160人の大所帯で浜街道を通り横浜警備に出動する。しかし、あまりにも大所帯の為、浜街道の宿が大勢の世話に慣れておらず「帰りはここを通らないでくれ」と幕府に申し入れ、帰りは一旦江戸に抜け、甲州街道を通過して帰った。まだ開国まもなく浜街道が盛んに利用されるようになる兆候の一幕である。

その浜街道を使い、八王子から生糸を横浜まで運んだ代表的な商人達が八王子の「罫水商人」達である。罫水商人は、罫水の地名の由来でもある「雨が降ると丘の山腹から勢いよく水が出てきてたまる」という事もあり、地形が農業に不向きな為、昔から流通を優先的に行っていたと考えられている。この罫水商人の中の一人、大塚五郎吉は、1854年(安政元)ペリーが浦賀に来航した際の品川に作られたお台場建設時に、罫水の丸太を運ぶのに協力をした。この丸太は今でもお台場に残っている。罫水商人は浜街道とともに発展してきたが、開国から一年後に幕府から「五品江戸回し令」が出され、地の利を生かせなくなり大きな打撃を受けた。その後50年に渡り浜街道は、絹・お茶を横浜に運ぶ道として栄えたが、甲武鉄道(中央線)や横浜線の開通と共に、流通の主流が馬車から電車で代わり浜街道は次第に使われなくなっていく。

第5項 明治時代の八王子織物

一方八王子織物産業は開国の生糸輸出ブームの煽りを受け、生糸価格が高騰し、八王子周辺の織物生産者は原材料である生糸が入手困難となった。しかし、それと同時期に政府が生糸の製造に精通している仏人技師ブリュナーをお雇い外国人として雇い、明治5年(1872)に官営模範工場の富岡製糸工場の設営。また、この時代に絹糸生産を行い、富を築いた片倉財閥(後に富岡製糸工場を運営)が出来るなど国内は絹糸ブームであった。

八王子織物も明治7年(1874)に八王子に絹木綿仕入人仲間を作り、八王子織物会所を設立し、そこで絹織物の取引が行われるようになった。そして八王子織物は博覧会と共進会に積極的に参加していった。まず、明治10年(1877)に第1回内国勸業博覧会に八王子の地域から、高橋仙之助がジャカード織機(自動織機)を使った織物で参加した。

その後、明治十八年に五品共進会が東京の上野で行われた。しかし、この五品共進会では八王子の織物は五位という大変不名誉な結果で終わった。敗因は八王子織物の染色にあった。八王子織物の染色では雨の日に着ると色が落ちてしまうものだった。この問題を解決するために、仲買商により八王子織物組合がつくられ、染色講習会を行うことになった。そこで講師に選ばれたのは、ウィーンで開かれた万国博覧会に行っていた中村喜一郎だっ

た。中村喜一郎は万国博覧会が終わった後もドイツで染色の研究をし、1年後に日本に戻り、京都の染殿で染料の研究をしていた。

その講習の結果は即座に現れ、明治23年(1890)に開かれた第3回内国観業博覧会で上位入賞し、明治30年代には、売り上げで1 京都西陣、2 桐生、に次ぎ八王子が三番目に入るようになった。

第6項 大正・昭和戦前期の八王子織物産業

この時代は変革期で、様々な事が変わった。八王子織物は男性物の製品が多かったのだが、大正に入り女性物も盛んに作られるようになった。「女房には八王子着物を与えよ」という格言も出来た。これは八王子織物が非常に地味だったからという。又、商品取引も市から店舗販売へ移った。

大正初年は非常に景気が良く、成金が増えた。機屋からも成金が生まれ、その資金を元に織り機も手織から力織機に代わった。八王子の町には電気が通り、力織機の導入により、周辺の農村の手織機は減り、織物生産は八王子の町へ集中していった。

昭和前期は世界恐慌に見舞われ織物産業も同じく不況だった。こうした中、八王子織物は工場を一斉休機し、海外輸出に勢力を注ぐなどの努力をした。

その最中に日本は戦争に突入し、「ぜいたくは敵だ」という言葉が昭和15年(1940)ころ出てくる。特に七・七禁止令が出て八王子織物は衰退していく。さらに昭和一五年(一九四〇)に企業整理があり軍需工場へ代わっていった。

第7項 戦後の八王子織物

昭和20年8月、八王子大空襲により八王子の町は焼け野原になり八王子織物は壊滅した。しかし、昭和22年(1947)に復興資金1億3000万円をかけて再復興した。復興後は絹織物から脱皮し、ウールを用いた製品を用いた。

その後八王子織物は、年々と売り上げを伸ばしていき、昭和45年(1970)には275億円稼ぐようになった。その翌年は300億を超すかと思われたが、昭和47年の日米繊維協定により八王子織物は衰退していった。この日米繊維協定の発端は、1955年に米国が繊維製品の関税引き下げを行い、「One dollar blouse」に代表される日本の低価格綿製品が多く輸入され米国の繊維業界の売り上げを圧迫したことから始まる。この後、数十年間日米繊維協定は難航するのだが、1971年10月15日に「日米繊維問題の政府間協定の了解覚書」を仮調印が行われ、日本の繊維業界へは米国から751億円の救済融資が実施される形で、日米繊維問題は一応の決着を見た。この日米繊維協定が難航した背景には、経済的理由の他、沖縄返還という政治的問題があったとされる。米国が沖縄を返還する代わりに、日本政府が繊維製品の規制に同意することが求められたのである。しかし、これは極秘扱いだったため表だって交渉が出来ず難航したと思われる。以上のような経緯から日本国内では日米線協定を「糸を売って縄(沖縄)を買う」と比喻された。

第8項 現在の絹織物(不況と闘う多摩シルクライフ 21 研究会)

この 100 年間、絹織物の売り上げに推移の変化は多々見られるが、昭和 35 年辺りから、高度経済成長やバブル時の成人式ブーム等で絹織物の需要は高かった。古き時代とは変わり、機械で糸を取り、良い品質の繭がとれ、白生地が安く、多く提供できるようになり、普段絹織物を買う事の少なかった庶民もこの煽りを受け、全国的に絹織物を着る人が増えていった。しかし、バブル経済終了、リーマンショックによる金融機関の破綻に伴う銀行の貸し渋りの結果や、個人のクレジットカード限度額の引き下げの為、個人が着物を買わずらく、又、生活様式の変化(和服から洋服へ)の為に絹織物には厳しい現状が続いている。

今まで、呉服屋は古くからの考え通りに、出せばある程度売れる流れ式の時代だったのに対し、相手にあった提案をしていく顧客重視のお店でないと売れない時代になった。このため京都や丹後の古くからの有名な問屋がこの時期に多く潰れた。

こういった流れの中、現在八王子で作られている多くの絹織物の原料である生糸は、中国やブラジルに頼っているのが現状である。生糸を作る時に繰糸(そうし、繭から出した糸を合わせて太くする工程)をするのだが、この時に物によって太さにバラつきが出来る。その場合は糸を足したり減らしたりを行い、均一の太さで生糸にしていくのだが、日本ので行う場合、生産人数が少ないので細太の選別が多少疎らになってしまうが、中国は人が多いので、そういった場合に直ぐに対応できる。日本は技術的には他国と大差ないが、規模の問題で外国に立ち向かうのは困難な状況である。

現在、東京に多摩地区の絹糸を中心として扱う「多摩シルクライフ 21 研究会」という団体がある。多摩産の生糸生産から織までの過程を認証し、付加価値を高めようとしている団体である。主宰の小此木エツ子さんは、東京繊維専門学校(現・東京農工大学)で製糸の事についての研究をしており、1993 年に東京農工大学工学部物質生物工学科講師を退官。その間数々の経歴を経て 1995 年に「多摩シルクライフ 21 研究会」を設立した。

小此木さんは、農工大学で蚕の品種と織物の研究をしていた時に、これからの時代、絹織物は蚕品種にまでこだわらなければならないと感じ、養蚕・撚糸・精練・織物の各業種の皆が集まって、素材から最終製品まで、総合的に質の良い織物を生産するシステムが必要だと考えた。

そこで、小此木さんは前例を求め、全国の養蚕農家にインタビューを行った。しかし、当時の絹織物の生産工程は各業種では最高品質を求める事はあったが、生糸から織物まで統合的に最高の品質を求めて製品を作る人・業者はだれ一人いなかったという。

当時の絹織物業界は異業種間の連携が全くとられていなく、一例を上げるならば、八王子で養蚕した蚕を、群馬県で糸を取り、京都で撚糸をした後、やっと織物を作るという事になる。京都のとても有名な織師の方に、織物の糸の品質についてインタビューしたときは「渡された糸で織るのが仕事です」と言われ、生糸の事には全く関与していないという現状であった。それほど絹織物業界は分業化の極みを歩んでいたのである。又、多くの職

人が高齢者の為、後を継ぐ者が無く、地域の技術が途絶えてしまう事も原因にあげられる。

そこで平成4年(1992)の農工大学退官一年前に、学術関係者・試験関係者・職人・伝統工芸関係者、みんなを集めて「科学技術展及び絹まつり」という大展示会を開いた。その時に集まった人たちで現在の「多摩シルクライフ21研究会」を設立した。

この多摩シルクライフ研究会は、多摩地区(八王子の堀之内・武蔵村山・町田)で育ててもらった蚕を、多摩シルクライフ研究会で全て買い取り、各顧客に合わせて、自分たちで機械や手で糸を丹念に取り、織師の方に卸すという、こだわって織物を作るシステムを使っている。先にも述べたが、このように養蚕家から織師まで統合的に関係を持ち、素材から最終製品のまで管理する事は、当時の絹織物業界では革新的であり、こういった経験から今後の日本の絹が生き残る為にはブランド化して行かなければならないという思いが芽生え、現在まで活動を行っている。そして平成20年(2008)に厳しい検査をし、絹の繭から繰糸した生糸等を用いて国内で製織、染織、加工及び縫製された純国産絹製品である事を証明する「純国産絹マーク」が日本絹業協会により作られ、国産の絹をより多くの人達に知ってもらおう活動が広まっている。

第4節 まとめ

八王子は、絹・織物を通して変化して行った土地だとわかった。養蚕から市場・地域を作り、そこで作った絹は世界各地へ輸出され、日本の経済を支えた。しかし、八王子織物の衰退のきっかけは日米繊維協定にあると判断する。海外に依存してしまうと一つのきっかけで大きく変わってしまうのだ。しかし、過去に八王子織物は致命的な衰退を経験してきたが、現在も昔ながらの多摩織や、ネクタイなどに形を変えて続いている。1000年あまりの年月を経て培われたDNAはそう易々と消えなかった。しかし、2012年から日本は養蚕農家への助成金を廃止することが決定した。これにより、2011年には穀側の津久井にある12の養蚕農家が完全撤退し、この余波は今後大きくなっていくと予想される。日本産の絹が窮地に立たされている中、小此木さんのような活動をする人が少しでも増えることが望ましいと感じる。今、またしても八王子織物業界は変革期に当たるのではないかと推測する。今まで培ったものを生かし、現在のライフスタイルに当てはめる新しいアプローチが求められていると感じた。

※八王子絹織物を語る上で生糸・絹の流通についても広範に論じる必要がある。この点については今後の研究の課題とする。

参考文献・引用

- (1) 馬場喜信『浜街道』かたくら書店(2001年03月)
- (2) 伊藤智夫『絹I』法政大学出版(1992年6月1日)
- (3) 富岡製糸場研究センター富岡市教育委員会編『富岡製糸工場のお雇い外国人に関する資料』富岡市教育委員会(2008年)

る調査報告書`特に首長ポール・ブリュナの実績に視点を当てて`中間報告』富岡市教育委員会(2010年)

- (4) 田中優子『手仕事の現在：多摩の織物をめぐって』法政大学出版局(2007年5月)
- (5) 東京織物卸商業組合『全国繊維産地品種別生産実績表』(2007年7月)
- (6) 内閣総理大臣官房広報局『絹の需要に関する世論調査』(1967年9月)
- (7) 濱崎實『絹糸紡績業の経済分析』明文書房(1990年9月)
- (8) 文化出版局『わかりやすい絹の科学』(1990年3月)
- (9) 片倉製糸紡績株式会社考査課 || 編輯『片倉製糸紡績株式会社二十年誌』(1931年)
- (10) 八王子織物組合『八王子織物工業組合百年史』(2000年2月27日)
- (11) 『八王子市史 上巻』(1963年)
- (12) 正田健一郎編『八王子織物史 上巻』(1965年)

フィールドワーク地リスト

- ・八王子郷土資料館
- ・羽村郷土資料館
- ・聖蹟桜ヶ丘記念館
- ・多摩市郷土資料館
- ・着物天野屋
- ・都立中央図書館

インタビュー

多摩シルクライフ 21 研究会 小此木エツ子様

第6章 まとめ

本論文で検証してきた5つの視点から、多摩地域の地域的特徴(ローカリティ)と、地域的特徴に影響を与えたとされる外部要因を元に下の表を作成した。

表1 視点ごとの地域的特徴比較

5つの視点	地域的特徴	外部要因
第1章 多摩川	多摩川の水防の特徴として、治水技術の向上で水害の頻度と被害は低くなったが水防意識は低下している。	鶴見川周辺は都市化が進んでおり、都市水防のリスクが高い。また、防災キャラバンなどの水防に関わる取り組みも活発で、鶴見川流域にすむ人々の水防意識は高い。
第2章 民話	里人と山人では、信仰の対象や死についての認識に差があり、それぞれが捉えている世界の構造が違うことから生まれる。	現代の人々の視点
第3章 市民農園	余暇を持っている人 自然を愛好する人 自然と関わりを持ちたい人	自然が少ない地域 働き詰めの人々
第4章 千人同心	八王子時は3段階組織 仕事内容:容易	蝦夷地時 5段階組織 仕事内容:困難 地理意識:変化
第5章 絹・織物	伝統的な八王子養蚕:織物産業	繁栄要因:開国後の海外の繋がり 衰退要因:日米繊維協定 ライフスタイルの変化

表1は5つの視点から捉えた多摩地区の地域的特徴と、その前提とした外部要因を示している。各視点からの地域的特徴と外部要因の関係性について説明をしていく。

(1) 第1章:多摩川

多摩川は、水防よりも治水に重みを置いているため、氾濫するリスクが高い地域(狛江市など)は水防意識が高いが、氾濫の影響を受けない地域や安全な地域は水防意識が低くなっている。一方、鶴見川は急激な都市化による都市水害の危険が増している。また、防災キャラバンなどの水防に関わる取り組みが行われているため、新住民が増加していても水防意識は高い。外部の鶴見川と比べると、多摩川には遊水地がないのが現状である。しかし、多摩川は土地の確保が困難である。だからこそ、鶴見川の水防活動や取り組みを見習い、今後予想困難な自然の脅威に対応するためにも水防意識を高める必要がある。

(2) 第2章:民話

里人と山人では、信仰の対象や死についての認識に差があり、それぞれが捉えている世

界の構造が違うことから生まれた。現代という外的要因から見ると、昔のように山人や里人の違いはないように考えられる。これは近代化により交通が便利になったこと、地域による職の差がなくなったこと、新住民の存在による村意識が低下したことなどが原因としてあげられる。

(3) 第3章：市民農園

市民農園を利用する人達は、住む場所に自然が少なく、働き詰めの人々が、余暇の時間を利用して自然との関わりを求め市民農園が注目され始めた。

(4) 第4章：千人同心

江戸初期より幕末まで存続した八王子千人同心だが、特筆した公務は蝦夷地開拓である。この蝦夷地に渡る前までは、3段階の組織構造であったのに対し、蝦夷地に渡った後は5段階の組織構造になっているのだ。これは箱館奉行所から遠く行政の力がそこまでは伝わらなかったからではないかと考える。

また現地で指揮をとっていた千人頭が八王子に戻ってから「新編武蔵国風土記」などの地理書の編纂を行った。これは蝦夷地という外的要因が八王子にもたらした変化である。

(5) 第5章：絹・織物

八王子は元来から生糸・織物業が有名であるが、開国を機に海外の需要が増えたという外的要因により飛躍的に成長していった。その後、戦争や高度経済成長などの煽りを受け盛衰して行ったが、日米繊維交渉を経て海外への輸出量が大きく減った。並行して戦後ライフスタイルが和服から洋服へ変化するに伴い生糸・織物業は衰退していく。

各視点から検証した結果(表1)、多摩地域は5つの視点に応じた多様な地域的特徴があり、それぞれに私たちの現在の解釈枠組をも含む空間的・歴史的・文化的な外部要因が深く関係している。多摩地区を取り巻く環境は一つの要因で成り立っているのではなく、こうした様々な要因が折り重なり、繋がっているという事である。多摩地域を一つで表す事は極めて困難で、この多様性がある多摩地域を検証するのであれば豊かな視点から研究をしていかなければならないという点を認識できた事は大きな発見であった。

本研究を経て、私たちが感じたことは、一見単純に見える事柄でもそれを調べていくと思いもよらぬ繋がりが増えていき、事柄をより深く理解することができるということであったという点を明記しておきたい。

謝辞

本論文を作成するに際し、お世話になった中庭光彦先生・松本祐一先生・長田貴仁先生・菅野光公先生・酒井麻衣子先生・諸橋正幸先生・大森映子先生・久恒啓一先生、大学院生の新部 均さん・新井 曜子さん、多摩大学生の北辻巧多郎さん・田中優希さん・小松 三夕希さん、活動を共にし、有益なコメントを数多くいただいたインターゼミの学生・先生方、快くインタビューを受けてくださった国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所防災情報課水防企画係長の斉藤英樹様・多摩シルクライフ 21 研究所主宰の小此木エツ子様、おくたま海沢ふれあい農園の堀隆雄様、そして最後に適切なタイミングで貴重なアドバイスをいただいた社会工学研究会寺島実郎先生に敬愛と感謝を贈ります。